法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-15

研究展望(平成24年)

TOYOSHIMA, Masayuki / 江口, 文恵 / 高橋, 悠介 / 表, きよし / 石井, 倫子 / 中司, 由起子 / 山中, 玲子 / 宮本, 圭造 / 豊島, 正之 / 竹内, 晶子 / EGUCHI, Fumie / TAKAHASHI, Yūsuke / OMOTE, Kiyoshi / ISHII, Tomoko / NAKATSUKA, Yukiko / YAMANAKA, Reiko / MIYAMOTO, Keizo / TAKEUCHI, Akiko

(出版者 / Publisher)
The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)
40

(開始ページ / Start Page)
175

(終了ページ / End Page)
208

(発行年 / Year)
2016-03-31

研究展望（平成二十四年）

平成二十四年に刊行された能・狂言関係の単行本、および雑誌等に発表された論文を取り上げる。例年と同じく、単行本（江口文恵）、資料研究・資料紹介（髙橋悠介）、能楽論研究（髙橋）、能楽史研究（表きよし）、作品研究（中司由起子・石井倫子・山中玲子）、演出・技法研究（山中）、狂言研究（宮本圭造・豊島正之）、外国語による能楽研究（竹内晶子）に分類し、分担執筆をおこなっているため、全体を展望するというより個別の論の紹介が主体となっていることをお断りしておく。また、重要な論稿を見落とすなどの遺漏もあろうと思う。ご寛恕を願う。

【単行本】

『武智鉄二　伝統と前衛』（岡本章・四方田犬彦編。B6判352頁。1月。作品社。二八〇〇円）

武智鉄二の業績を再検証した研究書。二〇一〇年六月に明治学院大学で行われた同名タイトルのシンポジウムをもとに、武智生誕百年にあたるこの年に刊行となった。能狂言、文楽、歌舞伎、映画、前衛美術など、各専門家が武智作品を取り上げるほか、武智と交流のあった役者の談話も収める。以下、主に能楽にかかわる章のみ紹介。小田幸子「武智鉄二と能狂言」は、『濯ぎ川』『彦市ばなし』などの能・狂言にかかわる武智作品を取り上げ、その活動を追い、論考の末尾に関係年表と作品一覧を付す。権藤芳一「武智鉄二と伝統芸能」は、幼少期からの武智との交流の逸話をまじえながら、武智が関与した伝統芸能全般について述べる。茂山千之丞「閉鎖的な世界に風穴を開ける」（聞き手・笠井賢一）では、多くの武智作品に出演した千之丞が『東は東』『夕鶴』などについて語っている。

『能楽大事典』（小林責・西哲生・羽田昶著。A5判1120頁。1月。筑摩書房。一五〇〇〇円）

能楽にまつわる膨大な項目を網羅した事典。昭和四十七年頃に着手、約四十年の歳月をかけ、千ページを超える大著となった。あとがきによると、著者三名のほか、発企者の増田正造をはじめ、十名近くの研究者が執筆・編纂に関わっている。全項目を五十音順に配列する点は当該分野の事典として

は珍しい。特に狂言の項目はかなり詳細である。巻末資料には、現行曲・復曲・新作の各一覧、道具・面の図録、能楽諸家系図、主要能楽堂一覧、楽器（四拍子）図を附載する。

『能のちから　生と死を見つめる祈りの芸能』（観世銕之丞著。A5判280頁。1月。青草書房。三三〇〇円）

観世家別家当主である著者の芸談。家系や、稽古・修行、作品についてなどが語られるほか、坂東三津五郎らとの対談も収録する。特に父観世静雪や伯父観世寿夫をそばで見ていた著者が両者について語る項や、各演目への思い入れや考え方が窺える作品にまつわるの談話が興味深い。また、多くの舞台写真をカラーで掲載しており、芸談としても写真集としても、濃い内容の一冊である。

金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書第17集『和泉流狂言の伝承　―金沢と名古屋―』（西村聡編。A4判86頁。1月。金沢大学人間社会域。非売品）

金沢大学と東京文化財研究所の共同開催で二〇一〇年十二月に行われた、タイトルと同名の公開講座の報告書。江戸時代から和泉流狂言の拠点であった、金沢と名古屋の芸態を比較している。当日の講演である西村聡「和泉流狂言史の金沢と名古屋」、高桑いづみ「狂言小舞の伝承を考える―野村万蔵家と狂言共同社のフシの比較を視点に―」の二本を収録するほか、西村の「〈棒縛〉の演出とその変遷―金沢と名古屋の比較を視点に―」を収める。比較実演の写真も掲載。

『のう・きょうげんの本』（国立劇場調査養成部・氷川まりこ編。A4判40頁。1月。日本芸術文化振興会。五〇〇円）

国立劇場が出版した、学童向けの能・狂言の入門書。舞台・面・装束・演技・登場人物などの基本事項について、写真を多用しながらわかりやすく解説する。公演形態や新作についても項を設けて丁寧に紹介する点は、劇場が作成した書籍ならではと言える。観世流宗家観世清和の談話を収録。

『追悼　野村万之介』（野村万之介を偲ぶ会編・発行。菊判111頁。2月。非売品）

二〇一〇年に逝去した狂言師野村万之介の追悼記念文集。演者・研究者・門下生ら三〇余名が寄稿する。各執筆者の文章から、故人の芸や温厚な人柄が伝わってくる。非売品のため、本書を手に取る機会が限られる点が惜しまれる。巻末に二〇一一年二月に行われた故人をしのぶ会の記録や、万之介の経歴、公演記録も収録する。

『絵でみてわかるはじめての古典　八巻　能・狂言・歌舞伎』（田中貴子編。A4変型判48頁。2月。学研教育出版。二五〇〇円）

子供向けに日本の古典文学を紹介する全十巻のうち、第八巻で古典芸能を取り上げている。能〈羽衣〉〈隅田川〉、狂言

〈附子〉など、小・中学校の教科書に採録されることの多い作品が中心で、イラストや写真を多く使用した説明のほか、声に出して読ませるために原文を抄録する。大判で活字も大きく、子供が絵本のように手に取って楽しめるよう様々な配慮が見られる。児童・学生のみならず、学習指導要領に古典芸能について明記されるようになった昨今、学校教員にも有益な一冊であろう。

『風姿花伝・花鏡』（小西甚一編訳。文庫判350頁。2月。たちばな出版。一二〇〇円）

編訳者の『世阿弥集』（一九七〇年、筑摩書房）の復刊『世阿弥能楽論集』（二〇〇四年、たちばな出版）から、三作品を選定、文庫化。タイトルにある二伝書および『能作書（三道）』を収録。巻末に小林保治の解説を付す。

『梅若六郎玄祥、能を旅する』（梅若六郎玄祥著。A4変型判80頁。2月。ハースト婦人画報社。二五〇〇円）

雑誌『婦人画報』連載の単行本化。著者が能作品の舞台となった土地を実際に訪れ、現地で当該作品の能装束を着けて舞う姿をカラー写真で掲載する。各地の名所旧跡や旅館・グルメについても紹介している。

『甲賀市史　【第二巻】甲賀衆の中世』（甲賀市史編さん委員会編。B5判528頁・付録ブックレット12頁。2月。甲賀市。三五〇〇円）

滋賀県甲賀市の市史第二巻で、第一巻の古代に続き、中世を通史としてまとめる。第四章第五節「文芸と芸能の展開」に近江猿楽下三座が取り上げられている。全八巻の予定。

野上豊一郎批評集成：文献篇『精解・風姿花伝』（野上豊一郎著。A5判256頁。2月。書肆心水。六四〇〇円）

二〇〇九年から発行されている、野上豊一郎の評論関係の著作を集めたシリーズの、入門篇・専門篇・人物篇に続く第四冊。「文献篇」と銘打たれた本書には『花伝書研究』（一九四八年）を書名改題の上、収録する。

『新発田「謡曲」のあゆみ』（澁谷嘉之編・発行。A4判横型206頁。3月。非売品）

新潟県新発田市における能の享受史を、明治期から現代までを丁寧に追う。親子二代で二十四世観世元滋の内弟子となった仁木家、現在の新発田観世同好会の歴史や歴代の中心人物等について紹介するほか、近世の新発田藩溝口氏時代の能楽史も、市史類を引用する形でふれている。

『浄瑠璃と謡文化　宇治加賀掾から近松・義太夫へ』（田草川みずき著。A5判374頁。3月。早稲田大学出版部。三八〇〇円）

学位論文の単行本化。能に造詣の深かった古浄瑠璃太夫宇

治加賀掾に関する論考を中心に、謡文化が浄瑠璃へ及ぼした影響を詳らかにしていく。浄瑠璃芸論と謡伝書との関係や浄瑠璃作品の謡曲摂取、技法面での関係など、あらゆる面から考察に及ぶ。著者が学生時代から謡を嗜んだ経験も多分に生かされていると言えよう。日本近世文学会賞受賞論文「宇治加賀掾の浄瑠璃芸論『竹子集』序文と『塵芥抄』系謡伝書―進藤以三著『筆の次』との関わりを中心に」収録。

『能・狂言を学ぶ人のために』（林和利編。四六判306頁。3月。世界思想社。二三〇〇円）

学術書・教養書を専門とする出版社が送る、様々なジャンルの入門書「学ぶ人のために」シリーズの能・狂言編。総勢二十一名の執筆者が、歴史、作品、伝書、演技等についてひも解くほか、用語・曲目解説、伝書の解題・解読の手引きなどの付録も充実している。

『古典劇との対話―今、舞台表現の魅力を探る』（みなもとごろう編。菊判113頁。3月。翰林書房。一八〇〇円）

二〇一〇年から二〇一一年にかけて日本女子大学で行われた三つの催し物の活字化。「Ⅰ　古典演劇の東西―女性・映画・演劇」は当日に観世寿夫『バッコスの信女』の記録映画を上映したもので、当該映画の監督である羽田澄子や、観世銕之丞、石井倫子らが寿夫や映画について語る。「Ⅱ　武智鉄二演出『東海道四谷怪談』をめぐって」も記録映画上映の後に、映画に出演した川口小枝らが登壇した模様を収録。「Ⅲ　ことばの身体性―語る・謳う・話す―」は観世流シテ方野村四郎や文楽大夫の豊竹咲大夫らが、言葉と古典演劇の関係について、能・浄瑠璃からシェイクスピアに至るまで討議に及んでいる。

『梅原猛の授業　能を観る』（梅原猛著。四六判300頁。4月。朝日新聞出版。一八〇〇円）

哲学者である著者が、「授業」と題し初心者向けに解説するシリーズの第四弾で能を扱う。二〇〇九年一月～二〇一〇年三月に行われた講演「梅原猛　能を観る」（於大槻能楽堂）をもとに編まれたもので、能の作品十五曲を取り上げ、詳説する。

中世文学と隣接諸学7『中世の芸能と文芸』（小林健二編。A5判592頁。5月。竹林舎。一四八〇〇円）

中世文学を様々な側面から照射する論文集全十巻のシリーズの第七巻芸能・文芸編。全五章計二十五本の論考からなり、能・狂言のほか、延年・舞楽・宴曲・幸若など、各分野の第一人者の研究論文が収録されている。能楽関係論文の詳細については作品研究および狂言研究の各項に譲る。

『伊藤正義　中世文華論集　第一巻　謡と能の世界(上)』（伊藤正義著。A5判471頁。6月。和泉書院。一四〇〇〇円）

能楽研究の泰斗で二〇〇九年に逝去した著者の著作集成。第一巻である本書は、作品研究の論考が中心で、著者が押し進めてきた伊勢物語や古今集の古注釈書と能の関連を論じたものが並ぶ。以降第六巻まで続刊予定。

『うつぼ舟Ⅳ　世阿弥の恋』（梅原猛著。四六判280頁。7月。角川学芸出版。二五〇〇円）

スーパー能を手がける梅原猛による、能にまつわる著作シリーズうつぼ舟の第四冊。恋・狂・闇・老の四部に分け、世阿弥関連作品について独特の切り口で自論を展開する。

『能・狂言の見方楽しみ方』（柳沢新治著。四六判232頁。8月。山川出版社。一八〇〇円）

元ＮＨＫディレクターの著者が、能・狂言について紹介する書。用語の解説だけでなく、「能の社会学」「能の経済学」など、当該分野の他の書籍ではあまり見られない視点から能を説明している点が新鮮である。古典芸能番組を手がけていた時の裏話など、著者ならではのエピソードも多く収める。

『風姿花伝の如く』（足立禮子著。四六判256頁。8月。ＰＨＰ研究所。一五〇〇円）

観世流女流能楽師の著者が、『風姿花伝』を中心に世阿弥伝書の一節を引き、それにまつわる自身の考えや体験を語る。内容は生い立ちや稽古、舞台、世阿弥のこと、新作能『ひめゆりの乙女達』についてなど。

『続　狂言の形成と展開』（橋本朝生著。Ａ５判658頁。9月。瑞木書房。一〇〇〇〇円）

狂言研究の第一人者の論考を集めた書。『狂言の成立と展開』（一九九六年）・『中世詩劇としての狂言』（一九九七年）以降の著作が中心で、著者の研究の集大成となった。公演パンフレットや『茶道学大系』などの別分野の書籍に執筆したものも収録されているのが非常にありがたい。二〇一一年九月に著者が急逝したため、自身が本書の完成まで携われなかったものの、全編にわたる正確無比な仕事ぶりが光る。巻末のあとがきは後事を託された夫人が執筆している。

『能のかたち　ＮＩＰＰＯＮ　美の玉手箱』（福岡市博物館編。Ａ４判272頁。9月。能のかたち展実行委員会。二一九〇円）

九月十五日～十一月十一日に開催された同名展覧会の図録。各所から集めた膨大な展示資料が、すべてカラー写真で掲載。特に能面の数の多さには驚かされる。巻末には同博物館所蔵の能面一覧をモノクロ写真で掲載する。なお、本研究所及び本学鴻山文庫の資料も出品・掲載されている。

『国立能楽堂特別展示　加賀の能楽名品展』（国立能楽堂調査資料係編、田邊三郎助・長崎巌監修。Ａ４変型判108頁。9月。日本芸術文化振興会。二三八〇円）

同名展示の図録。近世以降能がさかんだった石川県に伝わる名品を紹介するもので、尾山神社・江沼神社・金沢能楽美術館から出品された能・狂言面と装束の写真を収録。面については全七十七面を表・裏両方の写真を掲載するなど、編集にこだわりが見られる。能装束については末尾に詳細な解説が付されている。

『能面の世界』（西野春雄監修、見市泰男解説。菊判128頁。9月。平凡社。一八〇〇円）

面についての入門書。能面・狂言面を写真で紹介しながら解説を加える。能面単体だけでなく舞台写真もまじえて、どの面がどんな作品に用いられるのかを一目でわかるように配慮してある。初心者向けに能面の見分け方の解説のほか、制作工程や能面が鑑賞できる美術館・博物館なども紹介する。

『ふるさとの能面と芸能を訪ねて』（曾我孝司著。B6判167頁。10月。雄山閣。二六〇〇円）

岐阜県生まれの著者が、故郷とその近隣の能面と民俗芸能を調査した結果をまとめた書。各地の白山神社を中心に調査の上、白山信仰との結びつきを考察する。第一編は地方に伝わる能面の紹介で、岐阜のほか、奈良・滋賀・福井・石川の各県に調査が及ぶ。第二編では、岐阜・福井・石川の各地に伝わる芸能の検討で、幸若舞や延年、能狂言などを紹介。

『明治演劇史』（渡辺保著。四六判488頁。11月。講談社。二八〇〇円）

前著『江戸演劇史（上・下）』（二〇〇九年）に続く、演劇評論家である著者が演劇を通史的に捉えた書。維新に始まり、日本が混乱を極めた明治期に、演劇がたどった歩みを社会背景ともに綴る。能楽・文楽・歌舞伎といった古典演劇界のみならず、女優の誕生や吉田東伍による世阿弥伝書発見についても詳述するなど、テーマは多岐に亘っている。能楽関係箇所のみ章題を掲げておく。第一章一「もう一つの明治維新―梅若実と宝生九郎」、第二章三「岩倉邸天覧能」、第三章二「英照皇后と岩倉具視」、第三章四「芝山内能楽堂」、第六章一「能楽会と稲荷能」、第九章二「吉田東伍」。

『三島由紀夫と能楽　『近代能楽集』、または堕地獄者のパラダイス』（田村景子著。四六判300頁。11月。勉誠出版。二八〇〇円）

著者の学位論文をもとにした、三島由紀夫『近代能楽集』研究。二部構成で、第1部では近代以降の能楽史をおさえながら三島と能楽の接触について論じる。第2部は各作品の分析で、『近代能楽集』に入集した八作品は無論、三島自身が「廃曲」とした「源氏供養」についても論考に及び、三島と能楽とのかかわりすべてと真摯に向き合った著者の姿勢が窺える。

【資料研究・資料紹介】

まず、目録から紹介したい。石井倫子「幣原道太郎氏旧蔵能楽関係図書目録」（『能楽研究』36。3月）は、平成15年に獨協大学名誉教授幣原道太郎氏のご遺族より能楽研究所に寄贈を受けた能楽関係図書の目録。江戸中期筆の「風姿華伝抄」（四巻本系丙種本）や江戸初期筆の八帖本花伝書の善本から能楽関係の洋書までを含む約170点の資料が目録化されている。

次に、謡本・謡伝書と謡教授に関わる資料紹介を概観する。謡本の紹介としては、福島和夫「永禄七年金剛又兵衛康季節付謡本考―影印・覚書」（『日本音楽史研究』8。9月）と、小林健二「古典芸能研究センター伊藤正義文庫蔵『平松家旧蔵福王流番外謡曲八百十番本』解題」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』5。3月）がある。前者は、永禄七年（一五六四）八月十一日の金剛又兵衛康季の署名花押を有する、又兵衛康季節付の金剛流謡本を、影印と解題を付して紹介したもの。高砂・忠則・松風の三番を収めた列帖装一帖のみながら、知られる限り慶長以前に遡る現存唯一にして最古の金剛流謡本として貴重である。明治十五年山岸弥平刊金剛流内組本との異同や、上野学園大学日本音楽史研究所が所蔵する本書を含めた金剛流謡本（江戸後期写本五点など）の目録も掲載されている。後者は、伊藤正義氏が同古典芸能研究センターに寄贈した資料のうち、江戸後期に福王流の高弟であった平松善右衛門家の番外謡曲八百十番本（平松家本）について、『未刊謡曲集』続四での田中允氏による簡潔な紹介をふまえ詳しく考察し、曲名一覧を付したもの。この謡本は六十七冊・四百七十五番が現存しており、目録の奥書には、天明八年（一七八八）の大火で伝来の謡本写本を焼失した後、文政十一年（一八二八）に平松善右衛門信尚が書写させた旨がみえる。平岡家旧蔵の関西大学蔵『番外謡曲集』との近似点・相違点を、書き入れを中心に詳細に検討することで、両家に共通する宗家である福王家の謡本が親本として使われた可能性を推測、また、秘伝となる蘭曲やクセ、語リが省略されている点については、謡教授家として別に伝授する意図が指摘されている。

謡伝書については、大谷節子・松居郁子「京観世謡伝書『そなへはた』解題と翻刻」（『神戸女子大学文学部紀要』45。3月）が出ている。岩井七郎右衛門家四代の岩井直恒（一七二八～一八〇二）による謡の章法に関する四部の伝書の一つを、岩井家の筆頭弟子であった大西家に伝わる直恒自筆本を底本として翻刻し、解題を付したもの。解題によれば、底本は君家義知が直恒から口授された教えを筆録した本をもとに直恒自身が書写したもので、直恒の子、五代信精による校正の墨書や付箋も付いている。その他、同書を寛政十一年（一七九九）に岩井家の門人澤邉が清書した本（大西家所蔵）、及びペン書きの明治期写本（青木道喜氏所蔵、『あやはとり』等と合写）が伝本として存在しており、翻刻は虫損箇所を寛政十一

年写本で補い、明治期写本によって校合したという。謡の章法の理論書としては大変詳細なもので、翻刻では節記号が付されている箇所については活字と共に影印を組んでいるおり、原本の様子がよくわかるように紹介されている。

江戸後期の広島における謡教授を物語る資料紹介に、小林健二「「保田家旧蔵浅井織之丞等書簡」解題と翻刻」（『能楽研究』36。3月）がある。広島の商家保田家旧蔵の九通の書簡を貼り込んだ巻子本（県立広島大学学術センター図書館所蔵）の解題と翻刻紹介で、同書を撮影した画像もあわせて掲載されている。内容は、保田九左衛門宛ての浅井織之丞朝盈書状六通と、保田常槌宛の観世清暘の年頭挨拶状、山崎清吉・保田常槌宛の清暘の八朔礼状、保田九左衛門・兵蔵宛の浅井織之丞・官三郎・亀八郎連名の改年挨拶状で、文化九年（一八一二）から文政六年（一八二三）までにわたるものであることが考察されている。解題によれば、保田家の当主は四代目から七代目にかけて謡を嗜み、京観世の園氏や大坂の浅井織之丞について研鑽を積んでいたといい、保田家伝来の九種の揃いの謡本や謡本端本三点の概要も紹介されている。また、書状の内容から、浅井織之丞が中津の神事能の後に広島に寄って謡の稽古を付けていたことや、観世清暘に関する事績を紹介し、清暘が家督相続し左近と改名したと述べられている点などにも注目している。

演出研究に関わる資料紹介としては、喜多真王「翻刻『舞曲寿福抄』後藤得三本（三）」（『国立能楽堂調査研究』6。3月）が挙げられる。喜多七大夫古能の伝書『舞曲寿福抄』（寛政十一年序）の伝本のうち、後藤得三本（その複写本）の翻刻分載三回目で、約17丁分に相当する内容。〈融〉酌之舞・〈安宅〉延年之舞など演出についての記事が多い。〈湯谷〉で故郷に老母がいるといいつつ実は「隠し男」がいるため宗盛が暇を出さないのだとする有名な解釈が、すでに本書に習いとして書かれている点なども興味深い。

演能記録や番組史料に関わるものとしては、以下四点。まず、演能記録調査研究グループ編（代表・表章）「『触流し御能組』演者名索引（下）―〔『触流し御能組』演者名総覧と索引（五）〕」（『能楽研究』36。3月）は、享保六年以降、江戸城内で行われた演能記録を集成した『触流し御能組』から抽出された演者名の索引で、『能楽研究』34に掲載された立ち方の索引に続く、囃子方分の索引である。

青柳有利子・江口文恵・周重雷・中尾薫・深澤希望・入口敦志・竹本幹夫「『葛巻昌興日記』所引能楽関係記事稿（三）」（『演劇映像学２０１１　第４集』。3月）は、金沢藩主前田綱紀に近侍した葛巻昌興の日記（金沢市立玉川図書館近世資料館蔵）にみえる芸能関係記事紹介の三回目で、徳川綱吉治世の延宝九年（一六八一）五月から年末までの間の関係記事に解説が付されている。特に、同年八月十三日・二十二日・二十六日に前田家江戸屋敷で行われた将軍宣下祝儀能について、番組・役者・招待客をはじめとした実態がうかがえる記事が詳しく紹介されている。

『国立能楽堂』で連載の「証言・能楽史　能を見た人びとの記録」（213～224。1～12月）は、『妙法院日次記』延享五年五月六日・天明五年三月二十五日条・天明六年正月七日条・天明七年六月二十五日条・寛政四年九月十四日条、『真仁法親王日記』天明七年正月九・十・十二・十四日条、また『岡山藩日次記』元禄九年八月五・六日条の記事に短い解説を付したもの。妙法院門主・真仁法親王周辺での演能や、元禄九年（一六九六）に将軍綱吉が江戸城中奥舞台で催した能で、岡山藩主・池田綱政が「三輪」のシテを演じた際の、段取りや装束に関する記事などが取り上げられている。

幕末維新期に関しては、神戸女子大学古典芸能研究センター伊藤正義文庫にある約千七百点の番組を収める二十三冊の番組帳等を通して幕末以降の京都能楽界の様相を考察した、宮本圭造「幕末維新期の京都能楽界―伊藤正義文庫蔵『幕末明治京都等能番組集』の紹介と考察」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』5。3月）がある。同書は従来、「前川家旧蔵能番組」と呼ばれていたが、そのツレと思われる法政大学能楽研究所河村隆司文庫の番組も含めた総合的検討から、前川八兵衛が蒐集した膨大な番組集が、死後、京観世薗家の弟子で前川八兵衛とも交流があった富田清助の手元にわたり、富田清助により蒐集を続けた経緯が指摘されている。この番組集には、文政十二年（一八二九）から明治二十年代に及ぶ、多岐にわたる場での能が記載されており、特に幕末から明治初年にかけて京都で催された能興行はそのほとんどが網羅されているという。喜多流の大夫、竹内達三郎が所有する竹内舞台をはじめとした京都における能興行の舞台について考証し、片山真助・野村三次郎といった役者の活躍などをみつつ、幕末京都の能界がそれなりに隆盛していたことを指摘し、元治元年（一八六四）の大火後も迅速に舞台再建や能界復興が進んだことを紹介している。また、慶應二年五月の竹内舞台での能に喜多流家元が密かに出演し「石橋」を出していたり、江戸の家元を経済的に助成するための京都での能興行が確認できること、明治二年の観世清孝の京都での興行は大成功であったものの明治五年から十年代前半にかけての番組はほとんど見られず衰退期とみられること、など家元の動向に関わる指摘も興味深い。『幕末明治京都等能番組集』は写真撮影とデータ化が進められているというので、今後の活用が期待される。

近代については、以下二本。初代梅若実資料研究会「初代梅若実筆『芸事上数々其他秘書当座扣并ニ略見出シノ事』翻刻（二）」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』23。3月）は、梅若玄祥所蔵の同文書を三回に分けて紹介する連載の二回目。同能楽資料センターが所蔵する複写本で42枚分に相当する内容を翻刻する。能と歌舞伎の比較から始まって、能の心得や故実、諸記録、初代梅若実の活躍していた当時の能界の様子をうかがわせる記事が書かれている。また、齋藤祐一「「謡曲能楽実演に就きて」―『古市公威参考資料』所収の能楽記事より」（『知性と創造―日中学者の思考』3。1月）は、帝

国大学工科大学教授・内務省土木局長であった古市公威が初世梅若実の門下として行った演能活動を、土木学会附属図書館のマイクロ資料『古市公威参考資料』（古市公威の没後に知人らへの取材をもとにまとめられた資料）の「謡曲能楽実演に就きて」を通して紹介し、『梅若実日記』の対応記事と共に掲出したもの。

その他、能装束に関する研究に、田中淑江「能装束の着装の変化に関する一私見―小袖物能装束の寸法の変化から」（『国立能楽堂調査研究』6。3月）がある。加賀藩前田家に伝来した年記の明らかな小袖物の能装束二十四領について各々、仕立て上重要な十六ヶ所の採寸を行い、そのデータを詳細に分析し、能装束の形態や着装の変化を追ったものである。特に、文化～文政期と天保～安政期の二グループに分けて比較すると、後者は前者に比べ、身丈が約5㎝伸び、身幅、特に前幅が狭くなり、袖幅が肩幅より広い形状が急増する特徴があるといい、その背景には現在の「唐織紐」の源流となる着付けの小道具「帯」が使われるようになる等の着装の変化があったのではないかと推測する。能装束の寸法データと傾向分析は詳細なもので、絵画資料や文献資料にみえる着装方法も含め、総合的な考察がなされている。また、能舞台に関するものに、山田文子・河内浩志「建築家・大江宏の「能舞台」の記述についての基礎的考察」（『日本建築学会中国支部研究報告集』35。3月）がある。国立能楽堂等の能楽堂を制作した大江宏の著作『建築作法』『世界建築設計図集7国立能楽堂』『建築と気配』や設計図面に基づき、大江宏が能舞台をどのように捉えていたかを考察したものである。

最後に、様々な分野にわたる資料紹介として、月刊『観世』の見返しで連載中の「観世文庫の文書」にふれておく。前年に引き続き、観世文庫の資料が写真と簡潔な解題により紹介されており、紹介された書目は以下の通りである（括弧内は担当執筆者）。『能絵図』（深澤希望）、『舞台仕様書』（江口文恵）、『京都観世屋敷関係史料』（天野文雄）、『享保十九年二月二十二日於西ノ丸観世織部姨捨演能次第』（中司由起子）、『観世家歴代花押・名乗り等書留』（井上愛）、『片山豊恭より福王甚五郎へ言上状』（山中玲子）、『御稽古之控』（青柳有利子）、『観世元章編「能楽諸家等過去帳」』（落合博志）、『観世清暘遺言状』（小林健二）、『観世清親筆「あつめ書」』（鵜澤瑞希）、『陶嶺宗鉗筆贈観世元章詩文』（長田あかね）、『二月三日付成身院宛て細川持常書状』（小川剛生）。

【能楽論研究】

能楽論研究は少なく、世阿弥伝書に関わる三本のみ。重田みち「大様なる能と世阿弥の脇能」（『芸能史研究』198。7月）は、『花伝』花修篇に「大様にすべき能」「大様なる能」とみえる芸について、八嶋正治氏による先行研究を検証しつつ、それが世阿弥の祝言的脇能の形成過程に関わった経緯を考察したもの。花修篇第三条末尾の論は八嶋氏の指摘するように犬王の芸を念頭に「かゝり」を第一義とする芸、天女舞の重

視が背景にある一方、花修篇第四条の論はそれより後の応永二十年代に入る頃かそれ以降に著述されたもので、そこで述べられる「大様なる能」については、田楽新座の演じた老人約の登場する能や、後の世阿弥の「老体」概念に集約される能を想定する。そして、『三道』にみられるような祝言的脇能は、他座の芸を摂取参照して自座のものとした種々の「大様なる」芸が集められ、一体化されたものであると位置づける。伝書の形成過程も含め、多岐にわたる論点を持つ論文だが、観阿弥が学んだ「昔の馬の四郎」の鬼の芸が『申楽談儀』で「大様」と形容されていることの背景を関連記事と合わせて検討する中で、鬼の芸が大和猿楽古来の芸であったとする従来の説に対し、観阿弥が榎並座等の鬼の芸をはじめて学んだことで鬼能が大和猿楽のレパートリーとなった可能性を想定するなど、問題提起に富んでいる。

また、重田みち「『花伝』別紙口伝の秘伝性」（『鎮仙』301。5月）は、『花伝』別紙口伝最大の秘事「めずらしき」が初期三篇末尾近くの「物数を極むる心」を花の種とする論と密接に関わることを確認した上で、別紙口伝第三条「似せぬ位」と花修篇第三条、また別紙口伝第二条「節ハ定マレル形木、曲ハ上手ノモノ也」とされる「曲」概念と花修篇第二条をそれぞれ比較し、花修篇を書き始めた時から別紙口伝の草稿はすでに書かれていたが、花修篇を先に、別紙口伝を最後に相伝することを決めていたのではないかと想定する。また、応永二十年代に入って以降、別紙口伝は最奥の秘伝ではなくなり、『花鏡』や『至花道』が別紙口伝のさらに奥に位置付けられる経緯を、別紙口伝の「曲」概念が『花鏡』「音習道之事」に見えることや、『拾玉得花』の「花伝年来稽古より、物覚・問答・別紙、至花道・花鏡、如此の条々」云々という記事を通して考察する。

玉村恭「〈かかり〉はどこから・どこへ・どこで生ずるのか—世阿弥伝書の英訳比較を通じて」（『能楽研究』36。3月）は、世阿弥伝書にみえる「かかり」が、情趣だけにとどまらない多様な意味で使われていることを確認した上で、Nearman, Mark J.・Rimer, J. Thomas, & Yamazaki Masakazu・De Pooter, Erika.・Quinn, Shelley F.・Hare, Tom. による五種の世阿弥伝書の翻訳において「かかり」がどう翻訳され理解されているかを比較・分析し、「かかり」の特性と伝書翻訳の問題を考察したもの。訳語からみると、「かかり」は具体的に感知できるものと、抽象的なものによって存在を感じ取られるのみのものに分かれるが、両者には連続性・互換性があり、物事・事象の体と用を過度に区別せずある程度一体の形で表象することこそが、世阿弥における「かかり」という言葉の特性であるとする。さらに、そうした特性を生かして訳語を統一するなら tone という言葉は候補になりうるが、訳書には翻訳だけでなく差異が焦点化される注釈という性格も伴っているとし、必ずしも訳語を統一する必要はなく、多様な解釈の間の差異が存在することを肯定的に評価する。

【能楽史研究】

数年前までは江戸時代の中央や地方の能楽史研究が盛んだったが、近年は近代能楽史の研究が目立つようになった。この年の能楽史研究関係の論文も、近代のものがかなりの割合を占めている。題材や視点もさまざまであり、これからも暫くはこの傾向が続くように思われる。

世阿弥時代の能を論じたのが竹本幹夫「結崎座と観世座」(演劇映像学２０１１第４集。３月)である。翁猿楽座と能・狂言座の関連についての問題点を整理して猿楽が信仰から芸能へと脱皮していく経緯について論じたもので、早稲田大学・ストラスブール大学共催日仏演劇学会での研究発表原稿である。かつて表章が発表した論考を踏まえつつ、まず世阿弥と禅竹の伝書に見られる猿楽座に関する記事を取り上げ、特に世阿弥の所説について、表章の解釈に修正を加えながら禅竹説も加味しつつ細かく検討していく。中でも『申楽談儀』第二十三条に登場する大和猿楽諸座について、竹田座・出合座・坊城座は翁猿楽座であり、竹田座(円満井座)は禅竹の父弥三郎以後能・狂言座の棟梁が翁猿楽座の長を兼ねたこと、出合座は山田猿楽の後身であり山田猿楽も翁猿楽座だったが宝生・生市・観世の三兄弟のうち生市が翁猿楽座を継いで他の二人は能・狂言座の棟梁となったこと、坊城座は金剛との関係が疑われるが不明であることなどを述べる。これらの考察を踏まえ、表章が命名した翁座(翁グループ)・能座(演能グループ)という区別は、能・狂言座でも〈翁〉を演じたことから誤解を招きやすく、座の性格が神事と芸能に峻別されることから、「神事座」「芸能座」と呼ぶ方が実態に近いとする。そして結崎座と観世座といった神事座と芸能座の固有の関係が生じた理由として、一族の中で神事座と芸能座に枝分かれして親族同士が同じ祭礼猿楽を分担し合った可能性を想定している。問題点をわかりやすく整理しつつ、重要な指摘がなされている論考である。

室町時代から江戸時代にかけての能を取り上げた宮本圭造「武家手猿楽の系譜―能が武士の芸能になるまで―」(能楽研究35。３月)は、武士の芸能としての能という視点からの考察である。まず武家手猿楽の創始について、永享頃の大名松囃子流行の詳しい分析により、大名松囃子を契機として武士自らが芸能を演じる気運が高まったことを指摘、また十五世紀末には松囃子以外の場でも武家の手猿楽が盛んになるが、大名の家中に優れた手猿楽者が続出した様子も紹介されている。戦国大名も武士が身に付けるべき学芸として能を重視したので、武士の身分でありながら演能活動に励んだ者がいた。この武家役者の具体例として牛尾・馬淵・下川といった笛役者の考察が行われるが、実に幅広い資料を用いていることに驚かされる。そして特に笛役者が目立つのは軍陣の笛と関わりがあり、武家では笛の芸能が特別な意味付けとともに享受されていたとする。こうした武家役者の芸系が一流と見なされ、武士の芸道師範で活躍することになる。武家役者などの

手猿楽が大名やその家中の稽古に力を発揮し、武家役者は江戸時代になっても独自性を保ち続けると述べる。緻密で詳細な考察なので全貌を紹介しきれないが、江戸初期に喜多流が樹立されて諸藩が喜多流を採用したのも武家手猿楽の展開と関わるのではないかという指摘もあり、きわめて興味深い内容の論考である。

大山範子「伊藤正義先生遺稿「注釈の行衛―永禄二年禁裏御能をめぐって―」」（神戸女子大学古典芸能研究センター紀要5。3月）は、伊藤の遺稿を紹介しつつ大山が注釈を加えたもので、永禄二年（一五五九）四月十二日に催された禁裏能について、未紹介資料を用いて考察を試みている。まず『御湯殿上日記』と『言継卿記』のこの催しに関する記事を紹介し、次に禁裏能がどのような様態で行われたかを探るために伊藤要太郎校訂『匠明』所収の「禁中御殿当代之図」を転載、さらに室町後期の日記などに見られる禁裏能の上演場所に関する記事を掲げる。そしてようやく「禁裏御能見聞記」が翻刻紹介されるのだが、遺稿はここまでで途切れており、伊藤がこの資料をもとにどのような考察を行うつもりだったのかは残念ながら不明である。またこの資料を伊藤は琴堂文庫所蔵と考えていたようだが、琴堂文庫の資料が移管された彦根城博物館には所蔵されていないということで、所蔵者の確認も今後の課題として残されている。

林和利「尾張徳川家の能楽―式楽定型化の実相―」（『武家の文物と源氏物語絵―尾張徳川家伝来品を起点として』。3月）は尾張徳川家の能楽の特色を考察する。まず演能記録の分析から幕府の正式な演能形態が翁付き五番立てとされるのに対して尾張徳川家では番数に幅があり、狂言も幕府の二番に対して三番が多いといった違いがあることを明らかにする。また上演曲目の集計結果から神仏に関わる曲や和歌が主題の曲が多いことを指摘し、現代の人気曲とはかなり傾向が異なると言う。なお「泉郎」を由緒不明の曲とするが、これは能「海人」である。このほか、身内が楽しむための催しが圧倒的に多いことや、徳川美術館の能楽関係所蔵品には宝生流と関わるものが多いことなどを指摘している。徳川美術館収蔵品をつぶさに調査してもっと大掛かりな論考にする予定だったとのことなので、本格的な論考の発表を期待したい。

大谷節子・丸山奈巳「『文化十四年幸橋勧進能仕様留帳』解読―仕様書を通して見る観世清暘勧進能興行場―」（能と狂言10。4月）は、江戸での一世一代勧進能の興行場の建築仕様に関する考察。前年に大谷が紹介した仕様書に基づき、文化十三年から翌年にかけての観世清暘の勧進能興行場を詳細に分析する。まず勧進能場となった幸橋門外火除明地の敷地としての特徴と全体の建物配置を確認し、舞台や橋掛りについて江戸城本丸表能舞台と比較しながら検討する。使用された木材は椴（とどまつ）で最上級品ではないが、橋掛りは長く幅広で、基礎工事が入念に行われており、仮設建築としては極めて丁寧な施工だったと言う。続いて門や桟敷の構造を分析し、大名と町人は入口から厳密に分けられていたことや、

大名の桟敷が内廊下を備えた格の高い建築だったことを指摘する。このほか太鼓櫓や畳場・入込場などについても考察が行われるが、観客席すべてに雨を凌ぐ柿葺屋根が掛けられている点に特色が見られる。この勧進能の興行場は、興行二日目の夜に全焼したため再建されたものにもかかわらず、臨時の建造物としてではなく再利用を前提としていると推測されるほど本格的なものであることに驚かされる。

丸山奈巳はこのほか勧進能に関する二編の論考を発表している。「江戸時代後期の江戸における一世一代勧進能興行場—寛延3年、文化13年、天保2年、弘化5年の実例から、江戸時代の能劇場の建築物としての評価—」(日本建築学会計画系論文集77巻673号。3月)は、江戸での一世一代勧進能のうち晴天十五日間の興行となった寛延三年・文化十三年・天保二年(以上観世大夫)と弘化五年(宝生大夫)の四つについて敷地や建物の特徴を考察する。寛延と弘化は筋違橋門外火除明地、文化と天保は幸橋門外火除明地と場所が異なるが、同じ場所でも時期が違えば敷地の様子が大きく異なることや、劇場の規模が資金の負担金額に相当する見物人数によって決定されたこと、大名・幕臣・町人という異なる身分の見物者を収容するために建物が工夫されたことなど、興味深い指摘がなされている。また「江戸における巨大仮設能劇場に関する幕府の対応—寛延3年、文化13年、天保2年、弘化5年の一世一代勧進能興行の事例から—」(日本建築学会計画系論文集77巻674号。4月)では同じ四つの勧進能について、興行場となった敷地の特徴や設計・施工とそれに対する幕府の関わり方などを考察している。興行場は幕府の資金で建てられるが建築主は大夫であり、施設のすべての責任は大夫にあったが、興行における治安維持の役割は町奉行が果たしたことなどが指摘されている。

近代能楽史については、二〇一一年に行われた武蔵野大学能楽資料センター公開講座「能・狂言と近代国家」の成果が『武蔵野大学能楽資料センター紀要』23号(3月)に、三つの論文と鼎談として掲載されているので、まずこれらを紹介する。

小林責「明治維新と能・狂言」は、明治維新時の能楽界の特徴的現象を三つの点から説明する。一つ目は明治維新が能楽史上最大の危機だったことで、『梅若実日記』に基づきながら当時の能役者の動向を辿り、ワキ方・囃子方・狂言方に廃絶した流儀が多かったことを指摘する。二つ目は明治維新後の能楽復興に果たした金剛唯一の役割の大きさである。能楽研究所蔵の金剛舞台の番組をもとに、明治になってからも飯倉にあった舞台で唯一により公開の催しが着々と行われていたことを紹介する。唯一の功績が後世に忘れ去られて梅若実だけが功労者として取り上げられるようになった理由について、老朽化した舞台の移転をめぐるトラブルや再移転した舞台の焼失といった不幸な出来事、後継者がなかったことによる坂戸金剛家の断絶を挙げている。三つ目は狂言和泉流が大蔵流と肩を並べるメジャーな流儀に変質したことで、幕府

お抱えではなく禁裏に密着していた和泉流が王朝の東遷に従い東京に進出、三宅庄市が岩倉具視に抜擢されて次第に東京の流儀としての立場を確立したと述べている。

三浦裕子「岩倉具視の能楽政策と坊城俊政―明治一〇年代を中心に―」は、岩倉具視が能楽復興に果たした役割を再検討する。岩倉が最初に行った能楽復興事業が『能楽盛衰記』では明治九年の岩倉邸行幸啓能とされるのに、雑誌『能楽』では明治十四年の芝能楽堂開設とされる点に注目し、同じ池内信嘉の文章で違いがあることを指摘、また『岩倉公実記』と久米邦武『米欧回覧実記』との比較から、ヨーロッパのオペラ鑑賞を通じて能楽の価値を認識したのは久米邦武の方だったと言う。岩倉邸行幸啓能は能楽復興を意図したものではなく、能楽を叡覧する天皇の姿を通して岩倉自身の存在を強く訴えるものだった可能性を指摘、明治十一年に英照皇太后の青山大宮御所に能舞台が開設されたところからが岩倉の能楽復興への関与だとする。また明治十二年のグラント将軍饗応能は将軍の希望によるものとは考えられないこと、能楽社の設立に坊城俊政が大きな役割を果たしたことを指摘するなど、従来説明されている能楽復興の様子について、異なる見解を提示している。

氣多恵子「初代梅若実の日清・日露戦争―明治二〇～三〇年代の『梅若実日記』から―」は、明治二十～三十年代の日清戦争・日露戦争の時代に、後継者の徴兵に対して梅若実がどのような対応を行ったかを考察する。まず明治の日本の徴兵令について検討し、次第に徴兵が厳しくなっていく様子を紹介する。そして長男万三郎を分家梅若吉之丞の養子にしたのは「一家ノ主人タル者」が免役されるのを意識したものであり、『梅若実日記』によると特に病気でもない万三郎が陸軍省医務局長の診察を受けているのも免役対策だったとする。万三郎の弟の二代梅若実については『梅若実日記』の徴兵検査に関する記事により、素人弟子が心配して情報収集に努める様子や、抽籤の結果戦地に赴かずに済んだ様子が紹介される。徴兵によって戦地に送られた笛方の一噌銑二とシテ方の観世織雄の事例も取り上げられている。徴兵を逃れるために素人弟子の力を総動員し、高い診察費も惜しまず医師の診断を受け、遠く離れた神社まで参詣に出かけるという初代梅若実の行動を通して、戦意高揚に加担して献金をする一方で大切な人を戦場に送るまいとする何事にも懸命な実の姿を浮かび上がらせる。

山本東次郎・渡辺保・羽田昶の鼎談「明治演劇史の中の能・狂言―明治末から大正にかけて―」は、明治から昭和にかけて活躍した狂言方・シテ方・ワキ方の役者の様子が紹介される。山本東次郎が自身の記憶や父から聞いた話をもとに、さまざまな役者の様子を明快に語っていく点が印象深い。

そのほかの近代能楽史に関する論考を紹介する。中尾薫「能楽の近代化と池内信嘉―能楽の改良し得らるゝや否や―」（演劇学論叢12。7月）は、明治から大正にかけて能楽振興に努めた池内信嘉の能楽改良論を考察する。池内はあるべき姿

でない形で復興されている能楽界に危機感を持ち、能楽雑誌の発行・囃子方養成とその自立のための収入確保の二つを柱に活動を始めた。自身の発行する雑誌『能楽』において次第に改良を論じるようになり、時間短縮を目的とした〈小鍛冶〉の改良案を提示したりしていく。池内が時間短縮にこだわった理由として、明治維新後、大衆という新たな客層を視野に入れざるを得ない状況だったことがあげられる一方、皇族や外国の賓客饗応の催しでも時間短縮が必要とされたことも理由の一つとする。近代化の過程における能楽の大衆化と、強力な庇護者による能楽維持という二重構造を浮び上がらせる論になっている。

児玉竜一・中尾薫・原田真澄「アルベール・カーン博物館所蔵、日本演劇関係オートクロームおよびフィルムについて」(演劇映像学２０１１第４集。３月)は、フランスのアルベール・カーン博物館に所蔵されている能・京舞のフィルムと写真について考察したもので、早稲田大学演劇博物館グローバルＣＯＥ研究グループの成果報告である。このフィルム・写真の存在を知った研究グループが博物館で現物の調査を行い、それをもとに〈隅田川・小鍛冶・望月・羽衣・橋弁慶〉の五曲の映像(それぞれ三分以内の短いもの)が、いつどこで撮影され、誰が出演したのかを探っていく。出演者についてはシテを勤めたのが金剛謹之助であり、ワキや囃子方もある程度は特定できたが、京阪神で活躍した役者の写真が能楽雑誌にあまり掲載されないこともあり、不明の人物が残ったという。撮影場所は京都仏光寺の能舞台で、仏光寺の『御日記』により撮影日が大正元年十月三十日だったことを明らかにし、これが現存最古の能のフィルムであることが確定された。この日記によって撮影者のステファヌ・パセが文部省を通じて京都大学に撮影を依頼するといった撮影の背景も明らかになった。たまたま存在がわかったフィルム・写真の詳細が次第に明らかにされていく様子がうかがえる。

横山太郎「能楽研究は近代能楽に何をもたらしたか」(能と狂言10。４月)は、能楽研究が近代能楽に与えた影響の考察という興味深い論考。まず、明治十年代の久米邦武や重野安繹の能楽史研究が能楽の文化的正統性を社会に説明し、能楽の保護を正当化する役割を担ったと述べる。また吉田東伍『世阿弥十六部集』によって世阿弥の存在が広く知られるようになったことにより、謡曲が国民文学として古典の世界に一定の地位を築いたことも指摘する。世阿弥が注目されたことは世阿弥時代の能楽への関心を呼び起こし、当時の能楽改良運動とも関わりながら、復元的上演が試みられるようになる。世阿弥時代の能と、それとは異なる技法・演出の現行の能との間に緊張関係がもたらされ、それが次第に矛盾なく受け入れられるようになると言う。さらに、世阿弥の能楽論研究などの進展は能楽を近代知識層にとって欠かせない教養に押し上げ、能界外部の芸術的・知的関心が能役者の意識に影響を与え、行儀の良い観客層を生み出すことにもなったとしている。今後の能楽研究の役割として、外部(能楽に興味の

無い人々）を誘惑する研究の必要性を指摘している点も印象的である。

中嶋謙昌「梅田富三郎とその時代―大正期旧満洲における謡曲の広域指導―」（神戸女子大学古典芸能研究センター紀要6。7月）は、大正時代に旧満州の日本人居留者に対してどのように謡曲指導が行われていたかを考察したもので、前年に発表した大連能楽界の考察につながるもの。まず遼寧省中東部の遼陽を取り上げ、遼陽神社の神職だった宍戸速人（または隼太）が観世流の謡を指導して社中を結成、宍戸没後は弟子の守田省二が指導を引き継ぎ、やがて梅若派の梅田富三郎が指導者となる経緯を明らかにする。この梅田は梅若六郎の指導を受け、謡曲指導のため大正五年に遼寧省北部の撫順に招聘された人物で、撫順だけでなく南満州鉄道沿線の様々な都市で出張指導を行い、広域指導者として活躍した。梅田以外の広域指導者として観世流梅若派の浮田行寿、宝生流の片桐発作・小坂曽外雄、喜多流の森本又吉などが取り上げられ、棲み分けしたり競合したりしながら指導を展開した様子や、その活動状況によって地域の流派の勢力が変化する様子などを考察する。様々な資料を用いた考察で、謡曲指導者たちの地道な取り組みが日本人居留者の文化活動を支えていた様子がわかる。

佐藤和道「戦時下の能―複製技術の浸透と軍国主義」（演劇映像学2011第4集。3月）は、明治末から大正にかけて登場したレコード録音やラジオ放送という複製技術が能に及ぼした影響と、昭和になって台頭する軍国主義に能がどのように関わっていったかを考察する。謡曲が録音されたレコードの発売状況を詳細に調査し、中流層でも手の届く金額だったことや、稽古教材としてのレコードも発売されていたことを紹介する。大正十四年から始まったラジオ放送にはすぐに謡曲が登場し、劇場中継も盛んに行われたという。こうした複製技術によって規範的な謡が広く伝わることになり、詳細な直し入り謡本の刊行とともに謡い方の統一を実現し、家元制度の強化にもつながったと指摘する。また上流階級のものだった能が中流層にも浸透し、能楽堂以外の劇場での大衆能の開催が盛んになった。軍国主義の台頭は大衆芸能を思想統制に利用するが、当初は比較的規制が緩やかだった能も、戦意高揚のための新作能を多数上演するようになり、軍国主義を大衆に宣伝する役割を担わされていったと述べる。

黒川能の歴史に関する論考である石山祥子「所演曲拡大の時代―黒川能・演目分配協議と新曲登録合戦について」（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告8『近代日本における音楽・芸能の再検討Ⅱ』。3月）は、黒川能の所演曲増加の経緯を探る。黒川能には六百番近い演目があるため、中央の能では演じられなくなった作品が多く含まれるが、これらは黒川能の長い歴史のなかでずっと伝承されてきたものではない。石山はまず元禄二年には上座・下座合わせて十番しかなかった演目が江戸時代を通じて増加していき、明治三十年に宝生流寛政版謡本所収曲を中心に上座一二一番・下

座一一八番の演目分配協議が行われたことを確認する。この年以後両座が争って演目拡大に励んでいくが、実際に上演しないと演目として認められないため、両座が様々な名目で催しを行って新曲を演じた様子を「能執行届」によって把握していく。さまざまな謡本を探して豊公能や荘内藩士が作った荘内謡曲も取り入れるなど、懸命に演目拡大を図った様子がよくわかる。これらの演目のいくつかは上演を重ねて東京公演でも演じられたが、それが中央における復曲ブームに寄与した可能性も指摘されている。

ヨーロッパでの能楽理解を取り上げたものに、西野絢子「ポール・クローデルのエッセイ「能」とその反響—1930年代以降の西洋における能の受容史の中で」（藝文研究103。12月）があり、クローデルの能解釈が後世に与えた影響を探っている。まずクローデルが鑑賞した〈道成寺・羽衣・隅田川〉などの作品の解釈をエッセイにどう記したかを検討し、説明文や専門論文ではなく詩的なエッセイという文学ジャンルにおいて能を語った点を重視する。そして一九三〇年から現在に至るまでの西洋での能公演の状況を四期に分けて分析し、クローデルの能解釈への異論も見られるものの、西洋の観客が能を鑑賞する際にクローデルのエッセイが主要な参考書となったことを指摘する。さらにクローデルが夢幻能を翻案した「火刑台のジャンヌ・ダルク」の内容を紹介するとともに、二〇一二年に西野春雄が創作した新作能〈ジャンヌ・ダルク〉に言及し、能を通じた東西の視線の交差にクローデルが果たした役割の大きさを明らかにする。

【作品研究】

本年に発表された作品研究を概観すると、①前年に引き続いて世阿弥関連の研究が多く、他方、②『平家物語』をはじめ軍記や物語研究の側から能の作品を読む研究も目立つのが特徴であった。以下の展望は中司・石井・山中の三名による分担執筆だが、中司は主に①に関連する論を、石井は主に②に関連する論を扱い、そのほか、応仁の乱以降の作品や江戸時代の謡文化に関する論などを山中が担当している。

①世阿弥関連では、前年から継続する観世文庫創立二十周年記念「世阿弥自筆本の能」と題する『観世』の特別企画や、『国立能楽堂』の世阿弥作品の連続掲載があり、特に神能についての論稿が多い点が注目できる。

〈松浦佐用姫〉に関する論は『観世』と『国立能楽堂』に掲載。猪熊兼勝「松浦佐用姫の鏡とヒレ」（『観世』79—1。1月）は、〈松浦佐用姫〉に謡われる鏡と領巾に注目し、古代中国やインド等の考古学的資料や文献を紹介した論。松岡心平「世阿弥の九州能と「松浦佐用姫」」（『国立能楽堂』342。2月）は、世阿弥の神能の多くが九州に素材を求めるのは、足利義満の重要な政治課題が九州の統合にあったことと密接に関わっているとする。世阿弥が九州に縁が深く、連歌に堪能な梵灯や今川了俊のような文化人の影響を受けて〈鵜羽〉〈松浦之能〉を作能していたと想定する。足利将軍の治世と世阿

弥の作能に関連があることは、松岡心平「難波梅と呉服」（『国立能楽堂』341。1月）でも指摘される。〈呉服〉は、石清水八幡宮の籤引き、八幡神の神意によって将軍となった義教をたたえ、応神天皇の御代に日本に渡来した呉織と漢織が再び出現し、「今の世が応神天皇の時代の再現」となることがポイントであるとする。このように古代の亡霊が出現して当代を寿ぎ、将軍と天皇の代替わりをダブルで祝う手法は〈難波梅〉でも用いられると指摘。〈難波梅〉の制作年時に注目し、詞章中の「天つ日嗣」は単に「皇位」ではなく「皇位継承」を意味し、義持と称光天皇の御代を祝福するのが主題とする。

菊地仁「能〈阿古屋松〉の遠景―山形の「あこや姫伝説」をどう読むか」（『観世』79-2。2月）は、中世までは「あこや松」の歌例が少ないにも関わらず、詞章に「歌道の阿古屋の松の、名木」と出てくるのには、「陸奥の阿古屋の松に木隠れて…」の古歌をめぐる実方流離譚の存在が大きいと指摘。山形市に伝わる「あこや姫伝説」とこの古歌の関わりにも触れ、〈阿古屋松〉または「炭焼の能」にも「木魂聟入譚」や「炭焼き長者譚」の片鱗が見出せると述べる。この菊池論に拠り、阿古屋松をめぐる巨木伝承に注目したのが松岡心平「阿古屋松の巨木伝承」（『国立能楽堂』344。4月）。『今昔物語』等に見える巨木伝承の例をあげ、阿古屋松においてはじめて、陸奥の「松」の巨木伝承が成立したとする。阿古屋松の巨木伝承は、「東北に多い名松のイメージの上に、国司と「歌枕」の深い結びつきをベースとしながら陸奥国司実方の流離説話の肥大化の中で生まれ育った」物語と位置づける。松岡論は他に「実方に舞を捧げる塩竈明神―能「阿古屋松」の一断面（一）・（二）」もある（『観世』79-3、79-4。3、4月）。（一）では、〈阿古屋松〉前場の詞章を自筆本の訂正も含めて吟味し、塩竈明神の実方への思いの屈折を明らかにしていく。実方は老山人に高圧的態度で臨むが、山人は実方に同調をしながら登場すると解釈、登場の［サシ］からは実方への配慮と明神の心理の屈折を読み取る。キーワードとして「心の奥」を取り上げ、［上ゲ歌］「げにや名にし負ふ…」で初めて山人と実方の心が通じ合い、実方は「陸奥人の心の理解を深め、同時に歌枕探訪への道が開かれた」と読む。（二）では後場の舞に着目、明神は舞を通して実方や阿古屋松の木と一体化すると指摘。「シテとワキの相互浸透」というテーマ、「自他融合を通しての原人称的な時空出現」という作劇手法の点で〈西行桜〉と相似すると述べる。

天野文雄「能を再発見する1―老体で見る高砂―なぜ『高砂』を「老体」で上演するのか」（『国立能楽堂』345。5月）は、〈高砂〉の後シテを老体で上演する公演の解説。老体説の根拠となる資料を紹介すると共に、今回の上演では〔中ノ舞〕に近い「盤渉の神舞」を舞うことが報告された。山中玲子「「天女舞」応用の一形態―神と遊女が舞った菩薩の舞」（中世文学と隣接諸学7『中世の芸能と文芸』5月。竹林舎）は、大和猿楽への天女舞の導入後、世阿弥が「歌舞の菩薩」のイメージを利用して、女体夢幻能や神能を作ったことを、

舞前後の詞章分析と古型付や伝書の解読を通して明らかにする。〈老松・放生川・白楽天・難波〉では、人間と同様に、神に酒宴や祭礼の場で舞う神楽や舞楽を舞わせる手法がとられていると指摘。また、〈弓八幡〉〈養老〉のシテは「男体の神」というより、「菩薩」として舞を舞っているとする。舞の前後の詞章から、〈弓八幡〉では高良の神と八幡神が一体不可分であることが強調され、〈養老〉でも神仏同体が強調、諸天が天下る中で舞が舞われると指摘し、「世阿弥は女体の神能〈箱崎〉や〈鵜羽〉で試みたのと同様、男体の神にもまずは「菩薩の舞」を舞わせることで、物まねとは違う抽象的な舞、今日の呂中干舞に通じる舞を取り込んでいった」と考察する。〈高砂〉の舞については、天野稿と同様に後シテは老神であるとの立場をとるが、〈弓八幡〉〈養老〉と同じく「芸能の物まねではなく、神の表現としての舞」であると解釈する。〔序ノ舞〕の祖型の成立については「遊女即菩薩」説話が利用されたと指摘。本説の段階から「遊女即菩提」の要素を持つ〈江口〉〈仏原〉では、「遊女の芸〈序の部分〉がいつのまにか菩薩の舞〈呂中干舞〉に変わり」、舞後の詞章でまた遊女であることが示されているとし、「目の前でシテが変身していくような面白さが、初期の〔序ノ舞〕には在ったのだろう」とする。

同じく山中の「〈老松〉の小書「紅梅殿」の諸相と意義」（『能楽研究』36。3月）は前稿をふまえ、脇能の形式の変遷に論が展開する。〈老松〉の小書「紅梅殿」の概要と変遷を明らかにし、そこから古い脇能の姿を若い女体と老体のペアであったと想定し、〈弓八幡〉〈養老〉〈高砂〉において「世阿弥は、若い天女や稚児の舞と老体のシテのハタラキの組み合わせというスタイルを脱し、神でもあり仏でもあるようなシテが「菩薩の舞」の色を濃く残す呂中干舞を舞う、新しい脇能」を作り上げたとする。三苫佳子「世阿弥の「後シテ」考―能「富士山」の原形をめぐって」（『名古屋芸能文化』22。12月）は、現行金剛流の形式が世阿弥の原作を伝える可能性があるとしたうえで、『三道』の老体の能の記事の文脈を「男女一組の神体が登場することを前提にして書かれた」と解釈、〈老松〉〈難波〉に触れつつ、〈富士山〉の原型を後場に男女二体の神が登場する能と指摘する。

『鍄仙』「研究十二月往来」に掲載する世阿弥関連研究は、松岡心平「「百万」と南都律宗」（610。2月）と岩崎雅彦「「西行桜」の《夜桜》」（612。4月）。松岡稿は、〈百万〉において「南無釈迦牟尼仏」と「南無阿弥陀仏」の二つの念仏が混在するのは、阿弥陀信仰の融通念仏と釈迦念仏の合体が試みられた清涼寺の実際が反映していることと、春日大明神＝釈迦という貞慶の世界観を背景にして、〈百万〉の道行〈百万の曲舞〉を考える視点を提起。また〈百万〉には、南都の釈迦念仏が律僧導御により京都進出を果たしたように、『五音』にいう南都の女曲舞百万の京都進出、ひいては観阿弥・世阿弥の大和猿楽の京都進出と制覇さえも寓意されていると述べる。岩崎稿は〈西行桜〉結末の詞章「山陰に残る夜桜の花の枕」に注目し、「夜桜」の語が〈西行桜〉以前に用例がなく、連歌で

も用いられない極めて特異な言葉であったと指摘。〈西行桜〉が知られるに従い、俳諧を通じて一般的な語になったと指摘、「夜桜」に続く「花の枕」も和歌の用例が一例しかなく、当該詞章の表現が非常に個性的であると述べる。

①の最後に元雅と禅竹の作品研究にもふれておく。西村聡「元雅的世界の形成―〈隅田川〉における悲劇と奇跡」（中世文学と隣接諸学7小林健二編『中世の芸能と文芸』5月。竹林舎）は、従来悲劇的な結末として解釈されてきた〈隅田川〉の詞章を吟味し、生きているシテが奇跡を体験する「元雅的世界」において、〈隅田川〉を「亡者の幻をシテが見る奇跡」であると位置づける。『申楽談儀』〈隅田川〉の子方をめぐる演出における世阿弥と元雅の相違について、梅若丸を出現させる元雅の演出は奇跡性をより鮮明にしているとする。親子物狂能での結末では、母の前に見物衆の中から子が現れ再会が叶うが、その子を亡者にした点が〈隅田川〉の新しさであるとも指摘する。禅竹の作品研究は、井上愛「玉葛の自意識の葛藤―キリの「蛍」の表現から―」（『鍳仙』616。7月）。〈玉葛〉終曲部の詞章に『源氏物語』「蛍」巻に加え「魂を蛍火によそえる和泉式部の和歌における発想」が取り込まれていることに注目。世間のイメージと自画像との葛藤やそこからくる一種の自己破壊願望は、同じく禅竹作〈定家〉の式子内親王の意識構造とも近いことを指摘し、禅竹はこの両曲で「世間と己との狭間で苦しむ理性を持つ女性像を定着させた」とする。（以上中司）

次に、②軍記や物語研究の側からの作品研究を取り上げる。

先行作品を踏まえての作品研究は、『観世』の【特別企画】「平家物語と能」をはじめ、『平家物語』関連のものが多かった。まず『平家物語』から芸能へという視点で論じたものとして以下の四本を挙げる。

世阿弥作品を扱ったものが二本。小林保治「琵琶法師と世阿弥のことなど」（『観世』79-6。6月）は、『三道』「軍体」での「ことにことに平家の物語のままに書くべし」という世阿弥の言説における「平家の物語」の実態についての小論。『看聞御記』における琵琶法師の記述から、「平家の物語」に琵琶法師の語る「平家」を想定。〈実盛〉の作能にあたっては一方流系「平家」を参考にしながら、場面効果を計算の上で時系列による叙述を入れ替え、老武者実盛の無念の最期を強調しようと試みたと論ずる。五味文彦「物語化から演劇化へ―能の方法へ」（『観世』79-10。10月）は『一遍聖絵』に描かれている一遍の遊行先と『平家物語』の舞台が重なることに着目。時宗の僧たちが遊行先ゆかりの物話を『平家物語』中から選んで法談として語り、それをさらに演劇として深化させたものが能になったという流れを示す。その演劇化の過程で登場人物の生死への妄執を救う役割を「諸国一見の僧」が担わされるようになるなど、『平家物語』の物語性を尊重しつつ能の方法を作り上げていったと論ずる。

世阿弥以降の作品を対象とした論考も二本。小林健二「『平家物語』から芸能へ―悪七兵衛景清像の展開」（『観世』

79-7。7月）は景清像がいかに形成され展開していったかを『平家物語』を機軸に辿るもの。能に関しては、読み本系に多く記される平家残党伝承が舞曲をはじめとする語り物世界における景清像に結実していった可能性、能〈景清〉における日向国に流され盲目の乞食となった景清像の背景に、景清が盲僧達の間で平家語りの祖と目されており、地神盲僧が盛んであった日向国で崇められていたこととの関連性を指摘する。兵藤裕己「平家物語の〝語り〟から能へ――「俊寛」を中心に」（『観世』79-12。12月）は、『平家物語』巻三「足摺」における「心の程こそはかなけれ」「今こそ思ひ知られけれ」という語り手の述懐に今は幽界にいる俊寛自身の声が響き合っていることに着目し、『平家物語』においてはこのような「自由間接言説」が琵琶法師のシャーマニックな声によって語られ、幽界にいるモノたちを現世に呼び起こすと指摘。〈俊寛〉で俊寛の悲歎と絶望がリアルには再現されないこと、現在能でありながら俊寛が面を着けて演技を行うことに、この世ならぬ存在としての俊寛の姿を見る。

続いて世阿弥作の修羅能全般に関しての論。大津雄一「一の谷の公達」（『観世』79-8。8月）は源平の争いの帰趨を決した一の谷合戦において、『平家物語』が夫婦・親子といったさまざまな絆を断たれ理不尽な力により死へと追いやられた平家の公達を語ることで、彼らの無念さを享受者に強く印象づけると述べる。西村聡「世阿弥作品の軍体と名乗り――美しい修羅の自画像」（『観世』79-11。11月）は「何々の最期」は「何々はこのように生きた」という《生の物語》で、それを再現したいという欲望を消すことのできない心の修羅を抱えているとし、世阿弥作の修羅能の個性を軍体・名乗りの描写から読み直す。義経の最期を描かない義経の功名が最も輝いた屋島合戦を幽霊である後シテに執着させ、その「生への陶酔」が戦場の感覚を呼び覚まし成仏を妨げる〈屋島〉、『平家物語』では武将としての活躍にめざましいものがない通盛が自分本位の輝かしい昔を語るべく華やかな出立で登場する〈通盛〉、自らが主役として輝いた宮戦の昔に執着する〈頼政〉の個性を明らかにする。また、名乗らずに討たれた実盛・忠度はいずれも「死後の思い出」に執着する幽霊の姿が描かれると述べる。

個別の作品研究においては〈頼政〉についての論が集中した。池田英悟「〈頼政〉に見る老境の世界――「埋れ木の花さくことも…」歌を中心に――」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』23。3月）は〈頼政〉の主題歌「埋れ木の花さくこともなかりしに身のなる果てぞあはれなりける」の「埋れ木」が頼政自身の老境に至る生きざまとどのように符合するのかを考察。頼政自身の生涯を擬えた語として解釈されることの多い「埋れ木」を「老いた今の我が身」を嘆く言葉と捉え、作品中での頼政は文武両道で名を得た人物で、『平家物語』でも和歌を介在させて頼政の「武」を表現していることを確認。老境において和歌の世界に没頭していた頼政が歌詠みとしての自身を「埋れ木」と称するとは考えにくいことから、当該歌に

対して「埋れ木のような老の身で軍を起こし、敗死に追い込まれた」との解釈を提示する。天野文雄「〈頼政〉ではなぜ足利又太郎の活躍が描かれているのか」（『鎌仙』614。6月）はかねてより〈頼政〉で足利又太郎忠綱の活躍が印象的に描かれている点に注目していた天野の〈頼政〉主題論の総括ともいうべき論。前シテの「申すにつけて我ながら、よそにはあらず旅人の」の「旅人」を「前世から来世に向かう途中の旅人」と捉え、〈頼政〉にはこの世を「中宿」とみる世界観が示されていると述べた上で、平家方の武将や忠綱の活躍は「中宿」たる現世のはかなさの具体例として〈頼政〉の中心に置かれていると論ずる。

山下宏明「平家物の能を読む（一）～（七）（『観世』79-6～12。6～12月）は琵琶法師が『保元物語』『平治物語』『平家物語』という三つの「いくさ物語」を語り歩き、相互の交流の中で多様な諸本が生み出していた十四世紀前半の状況を視野に入れつつ、〈頼政〉〈鵺〉〈実盛〉〈千手〉を読み解く連載。この中でも〈鵺〉前場における鵺の嘆き「こがれて堪へぬいにしへを忍び果つべき隙ぞなき」の「いにしへ」には崇徳院の不遇の思いが込められており、鵺自身が崇徳院の怨念を背負っていること、そしてそれを退治する頼政もまた平家に背き破れ、その平家も源氏に敗れるという「王権の行方」の中で世阿弥が〈頼政〉〈鵺〉を作ったとの指摘がある。

これ以外の平家物を扱ったものに岡田三津子「《先帝》教経の軍語りを導くもの―乳母に語る一門の最期―」（『観世』79-9。9月）がある。廃曲〈先帝〉に着目し、『平家物語』においては武勇の人としての側面が強調される教経が乳母に軍語りを聞かせることに着目したもの。養い君に対して深い愛情を注ぐ『平家物語』の乳母たちの姿が〈先帝〉のツレ教経の乳母三位の局に投影されているを指摘した上で、建礼門院をはじめ壇ノ浦合戦で生け捕りとなった多くの女房たちの代表者として三位の局が造型されているとし、教経の軍語りを三位の局に代表される多くの女房たちを慰めるためのものと位置づける。『平家物語』において壇ノ浦合戦に加わってはいない知盛が〈碇潜〉や〈船弁慶〉で長刀を持たされることの意味について論じた伊海孝充「長刀を持つ知盛の成立―〈碇潜〉〈船弁慶〉をめぐる試論―」（『切合能の研究』所収）とも通ずる問題意識が窺われる。

田村良平「能〈千手　重衣之舞〉の演出・再構成」（『明星大学研究紀要　人文学部・日本文化学科』20。3月）は二〇一一年九月に大阪・大槻能楽堂自主公演で演じられた能〈千手〉の新しい小書「重衣之舞（きぬぎぬのまい）」の制作に関する覚え書き。観世流の小書「郢曲之舞」に通ずる演出ながら、詞章の整理・型の見直しを行い、遊女・白拍子の芸の見せどころである「クセ」は省略せず常の通り舞い、「郢曲之舞」では【序ノ舞】を【中ノ舞】に替えて舞うところを、【序ノ舞】の寸法を短くして白拍子の足使いを見せる「序」に重きを置くなどの処理を施し、全曲通して一時間程度に収めたという。本演出はその後も東京で二度上演され、今年秋にも大

槻能楽堂自主公演での再演が決まっている。

高木信「能を観る〈紫式部〉、あるいはジャンルの交差点を漂う〈亡霊〉―「海人の塩焼く」言説をめぐる謡曲、『平家物語』―」（『物語研究』12。3月）は『源氏物語』『平家物語』そして謡曲の言説との間に発生するインターテクスト的関連を物語研究からのアプローチによって解き明かしたもの。『源氏物語』と〈須磨源氏〉〈忠度〉に共通して登場する「桜」が「若木の桜」「浮世のわざにこりずまの」という詞章を媒介に、桜を植えた光源氏（『源氏物語』）・桜を眺める光源氏の亡霊（〈須磨源氏〉）・墓標として桜を植えた忠度の「ゆかりの人」（〈忠度〉）、桜を詠み桜と一体化してゆく忠度の亡霊（〈忠度〉）とオーバーラップしていくと述べ、さらに『源氏物語』と〈忠度〉〈敦盛〉が、〈須磨源氏〉を媒介に「須磨」「海人の塩焼く」という表現で重なり合う構図を指摘。物語研究の手法を用いての能のテクスト分析は能楽研究者にはあまり馴染みのないものであるが、今後の作品研究の新たな可能性を示すものでもあろう。

『中世の芸能と文芸』所収の論考を二本。坂井孝一「曾我兄弟の敵討ちにみる史実から芸能への展開」は、曾我兄弟の敵討ちという「史実」がどのように芸能へと展開していったかを、『曾我物語』真名本と能の「曾我物」を取り上げて考察。真名本で祐成がわざわざ北条時政を烏帽子親に選んでいる点に時政が兄弟の敵討ちに手を貸していた片鱗があるとし、〈元服曾我〉が祐経討ちをあくまで十郎・五郎二人だけの行為として描くことには、親の敵を討つという自力救済を特別なものと意義づける狙いがあったと述べる。また、〈元服曾我〉が箱根の別当の位置づけや箱王の人物像という点において真名本と近似しながらも、兄祐成が路次で箱王を元服させていることの異常性を指摘。真名本の世界を受容しながらも「曾我物」という新たなジャンルを切り拓いた作者の力量を見る。「史実」が物語を媒介にどのように芸能化されていくかという視点は確かに有効ではあるが、資料的な制約がある中で何をどこまで「史実」と認めるのかは難しい問題といえる。室町中後期における『曾我物語』および曾我伝承と諸芸能との関係は実に複雑な様相を呈しており、真名本『曾我物語』から能へという単純な流れでは片付かない。今後より広い視座からの考察が求められる。

小林健二「能の絵画的展開―二つの新出資料をめぐって―」は学会未発表の新出資料二点（①石川透氏蔵断簡・②大分市美術館蔵絵巻「張良」）から、江戸時代前期における能絵巻の制作目的と制作方法を考察したもの。①について、散らし書きの詞書が〈鵺〉の詞章と一致することから〈鵺〉の後場の一場面を描いたものであり、描かれた亡霊の姿が〈鵺〉の型付と重なることにより、絵師が実際の上演舞台を踏まえて描いていることを指摘。視覚的に映える題材とは言い難い〈鵺〉のような作品まで、新たに絵巻の素材として求められるようになったことを明らかにした。一方②は能絵巻としては珍しく詞書を伴わない絵のみの作例であるが、〈張良〉の詞章との比

較により、絵師が謡本から得られる情報を土台に幸若舞曲や同時代に制作された張良の絵入り本なども参照しつつ本絵巻を制作したことを明らかにし、巻末に和歌「君が代の年の数をば白浜の浜の真砂と誰か敷きけむ」（『新古今集』巻七・賀・紀貫之）を付して祝言性を高めたとする。さらに能の舞台展開を知らない人間には理解しづらいはずの内容の絵巻が制作されたのは、謡などを通じて〈張良〉の話が十分ポピュラーになっていたからだと指摘し、本作を「能を絵画化した究極のカタチ」と位置づけている。（以上石井）

以下では、応仁の乱以後の作者や近世の作品に関する論等を扱う。前出の『中世の芸能と文芸』には、当然ながら信光や禅鳳についての論も収められている。樹下文隆「新世代の革新性―観世信光―」は、信光の新しさを「先行曲の方法を徹底的に学び、……学んだ成果を極限まで使いこなした」点とし、それを「同時代の知の集積と展開に見る新しさ」と通じるものと見る。穏当な結論だが、それよりも、『能本作者注文』の信光作品の配列が「当時の能の愛好家たちによる」何らかの分類・配列意識を反映しているという前提で、前後の曲との関連や当時の文芸をめぐる状況を踏まえつつ散逸曲の内容を推定する部分が興味深かった。石井倫子「〈生田敦盛〉試論―小敦盛譚の風流化をめぐって―」は、金春禅鳳作〈生田敦盛〉が唱導の語る小敦盛譚を基に〈維盛〉をはじめ複数の先行曲の趣向を取り込んで成立した経緯を丁寧に解き明かし、同曲における子方の重視や「喜びの舞」から修羅道の苦患への急転などに「小敦盛譚の風流化」を見る。

このほか、国立能楽堂の上演パンフレットにも作品研究に関わる資料についての小論が載った。田中貴子「中世人にとっての『古事記』『日本書紀』」（『国立能楽堂』350。10月）は記紀の中世的解釈の例として伊弉諾・伊弉冉二神の国造り神話と関わる鵜鴒のエピソードについて紹介。小峯和明「愛宕山の太郎坊―中世天狗の一断面」（同352。12月）は、愛宕山の太郎坊のイメージを、魔道に堕ちた学僧や乱世を画策する怨霊として見るだけでなく、『十二類絵巻』を媒介に、室町期の一揆集団とも結びつけて説明する。

時代がくだって、近世の謡曲をめぐる文化史研究が三本。伊海孝充「謡曲〈白うるり〉の成立背景―『徒然草』の秘伝・中世神道説・謡文化が交叉するところ」（『能楽研究』36。3月）は、江戸初期に古活字本が刊行されて広まり注釈書も多く作られた『徒然草』を題材にした番外曲をめぐる文化史的考察。謡曲〈白うるり〉のシテは「天地開闢の時に現れた伊根元神をもとに造型」されているらしいこと、その背景に、近世『徒然草』研究における「しろうるり」高尚化の言説があったこと、本曲の構想には作曲者である芥花堂尤最の教養や人間関係が密接に関わっているらしいこと等を指摘する。江口文恵「番外曲〈竹取〉考」（『鎧仙』619。11月）も同じく江戸時代の番外曲と作者をめぐる考察。『竹取物語』ではなく『万葉集』に基づく番外曲〈竹取〉を取り上げ、同曲が江戸初期に古活字版で刊行された『徒然草』の影響を受けている可

能性を指摘。詞章に反映している他の文献や文章力等から能に関しては素人でも教養の高い人物を作者に想定する。石黒吉次郎「謡曲の伝説化についての一考察―『謡曲画誌』の注釈から」（『専修国文』90。1月）は、『謡曲画誌』の記述によりつつ近世における謡曲の伝説化の諸相とその後の注釈書への影響について述べる。前年刊行の、『謡曲画誌　影印・翻刻・訳註』（石黒吉次郎・小林保治、勉誠出版）の「注を補う意味もこめて」の執筆である由。（以上山中）

【演出・技法研究】

演出研究や技法研究に関わる論に移る。高桑いづみ「下ゲゴマ試論」（『能と狂言』10。4月）は、世阿弥自筆能本、『塵芥抄』、下間少進手沢車屋本を対象に、それぞれの「下ゲゴマ」が意味するところを精査・検討するとともに、謡の記譜法の変遷を考察する。桃山期の謡本の多くに「ハル」の直前の下ゲゴマが中ウキ音を示す例を見いだし、経過音であるウキを謡う際の「息扱いの変化を下ゲゴマで表記した可能性」を指摘する点など、興味深かった。藤岡道子「『岡家本江戸初期能型付』の衣装付一覧と考察その二」（『京都聖母女学院短期大学研究紀要』41。3月）は、『岡家本江戸初期能型付』巻三に所収のいわゆる「蟹物」三二曲のうち半数を取り上げ、衣装付部分を一覧し若干の考察を加えたもの。同時代の能絵に描かれた衣装なども参照する。全六巻分の完結を期待したい。

『鍄仙』「研究十二月往来」の中では宮本圭造「鞨鼓舞の系譜―〈自然居士〉に鞨鼓舞はあったか―」（611。3月）、中司由起子「『秋田城介型付』におけるタイハイ」（620。12月）の二本が演出や技法に触れた論だが、両者の方向性は異なる。宮本稿は、芸能史を踏まえた作品研究。〈自然居士〉終曲部の詞章分析や中世における自然居士像から、居士の芸尽くしは最後まで能が中心だったはずであることを指摘し、囃子物の伴奏楽器に過ぎなかった羯鼓が独立した器楽舞として大流行したのが室町前期であることを資料によって跡づけたうえで、〈自然居士〉〈花月〉〈東岸居士〉に独立の羯鼓舞が採り入れられたのも流行を受けての「改作の際の処置」とする。中司稿は演出用語の史的研究。秋田城介筆の型付における「タイハイ」が現行の「左右」に当たることを用例から明らかにし、「タイハイ」が早くから特定の所作の名称として用いられていたこと、左退拝、右退拝、カタタイハイ等のバリエーションがあり、既存の少ない用語を工夫して所作を書き留めようとした様子がうかがわれること等を指摘する。

特に能の技法分析やその習得に関しては、異分野融合、教育的視点など、新しいスタイルの研究も増えてきている。従来の「演出・技法研究」が多くの場合、作品研究の一助となることを目指していたのに対し、新しいタイプの研究は、能楽の技法のあり方そのものを科学的に解明しようとし、あるいは、能楽の魅力や伝承方法を教育の場に活かす方法を探るなど、独自の方向で進められている。

内記綾子・青柳龍也による「能楽音声記録の謡解析手法」「能楽映像記録の舞動作解析手法」は、ともに『じんもんこん２０１２論文集』（２０１２（７）。11月）所収。謡については、発声のタイミングと音高を解析、複数の演者による謡を比較表示する手法を提案し、舞動作については、能楽映像記録の二次元画像から三次元姿勢と型を認識する手法を提案する。どちらもごく基本的な型や謡のごく一部の解析ではあるが、特に舞の解析は、モーションキャプチャを前提とせず既存の映像記録を利用できるという点が興味深かった。

『能と狂言』10号にも、前年の世阿弥忌セミナーの企画「能楽研究の近未来―新しい視点と方法の試み―」に基づく論が三本載る。そのうち、三宅晶子「テキストの可能性―三面マルチ画像の利用」は、複数のカメラを利用したマルチ画面の能楽映像記録の実例と評価を踏まえ、マルチ画面の「映像」は鑑賞には向かないが、そこから静止画面を切り取り詞章と組み合わせた冊子教材には大きな可能性があることを指摘する。山中玲子「所作単元デジタルデータベースと演技合成ツールの試み」は、能の所作単元ごとに３ＤＣＧを作成しそれを組み合わせて舞を再現する方法を探る研究の報告と、そうしたＣＧを利用した新しい型付研究の提言。ともに、新しいテクノロジーを使って能の普及・教育や研究に活かす方法を探る。横山太郎「能楽研究は近代能楽に何をもたらしたか」については「能楽史研究」の項参照。

玉村恭「〈稽古〉の現象学―能楽仕舞の習得過程の微視的分析―」（『上越教育大学研究紀要』31巻。２月）は、古典芸能の〈稽古〉で起こることの微細な観察・記述を通して、「古典芸能の教育観とその現代的意義を探る」試み。世阿弥の稽古論などを引くのではなく著者自身の経験やそこでの感覚に基づきつつ論じている点が新しい。あることが〈できない〉とは、別のこと（「普通ならこうなる」という一連の流れ）が〈できる〉ようになっていることの証であるとの分析や、モースの「模倣論」に反して「〈価値〉の承認、〈威光〉の感得が、学習に先立」たない例もあるのだという指摘も興味深い。一方、「左足で止まる」のような、価値が見いだせないことをも学ぶのは、やはりそこに〈威光〉を感じているのではないかという気もするが、どうだろうか。いずれにせよ、ここに述べられていることは古典芸能に深く関わる人々にとっては当たり前のことだろうし、逆に知らない人にとっては、著者のくどいほど丁寧な説明によっても腑に落ちない部分があるのだろう（だからこそ著者は丁寧すぎるほどに言葉を重ねるのだろう）。それでもやはり言葉を尽くして記述していく試みは続けていってほしいと思う。

【狂言研究】

本年に発表された狂言関係の論考のうち、狂言の語学的研究に関する論考を豊島正之が、それ以外の論考を宮本圭造が担当する。まずは、「それ以外の論考」から。

本年の狂言関係の論考には、新資料を紹介したものが多く

目に付いた。まず取り上げるべきは、江島弘志氏蔵の『古狂言後素帖』を紹介した西野春雄「新出資料『古狂言後素帖』について」(『国立能楽堂調査研究』6)であろう。西野によれば、狂言の上演場面を描いた百十図の扇面図を折帖にしたもので、江戸前期の筆という。すでに『狂言集成』に黒木勘蔵の所蔵として四十四図が挿絵に掲載されていたものであるが、今回その資料の全容が明らかになったことになる。とりわけ注目されるのは、百十図の中に、狂言の現行演目にはない珍しい曲目の図が少なからず含まれていることである。〈いとより・花物狂・しほくみ・砧・ししおどり・鐘売中将〉などがそれであるが、中には若衆歌舞伎の狂言として盛んに演じられていた演目も混じっており、狂言が固定化する中で失われていった廃絶曲目の姿を生き生きと伝える数少ない資料として、きわめて価値が高い。本論文では、これらを含め、百十図全てについて、各流の台本・演出との比較がなされている。台本の伝わらない曲や、現行演出とは異なる場面を描いている曲も少なくなく、狂言の作品研究の材料としてきわめて有用。今後の狂言研究に与える影響はすこぶる大きいと言える。なお、これと同じ図柄の狂言図は他にもいくつか確認されているが、その中には能と狂言の両方を交互に描いて一巻としたものが複数あり、今後はそれらも含め、その制作環境を明らかにしていくことが求められよう。

同じく狂言の絵画資料を取り上げたものに、藤岡道子「狂言の絵画資料の収集(その五)狂言古図の有力な一群について」(『東洋哲学研究所紀要』28。12月)がある。徳川美術館蔵『山脇流狂言図』、国立能楽堂蔵『狂言古画帖』など、江戸前期のものと思われる狂言古図の伝存資料を概観し、その所収曲目の一覧を載せる。

間狂言台本の新資料紹介もあった。落合博志「翻刻　国文学研究資料館蔵貞享二年写『大蔵流能間』」(『調査研究報告』32。3月)は、宇佐の賀徳某が貞享二年に書写した間狂言の台本の紹介。奥書に弥右衛門の伝を受けた大蔵又左衛門の本を写した、とあり、大蔵流弥右衛門派の台本ということになる。貞享二年松井本と並んで、間狂言のまとまった台本として早い部類に属する貴重な資料。恵阪悟「『遠集間』(翻刻)」(『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』5。3月)は、同センター伊藤正義文庫蔵の間狂言台本『遠集間』を翻刻紹介したもので、その書名の通り、〈草薙・蛙・錦戸・楯尾・河水〉など、稀曲の間狂言を収録したもの。資料の概要については紀要の前号に掲載されているが、大蔵流の台本と見られるという。

また、本狂言台本の資料紹介には、前年に続き、狂言研究会「『文久写本狂言集』(愛知県立大学附属図書館蔵)翻刻(六)」(『あいち国文』6。9月)、小谷成子・野崎典子「『和泉流秘書』(愛知県立大学附属図書館蔵)翻刻・解題十二」(『愛知県立大学日本文化学部論集(国語国文学科編)』3。3月)があった。後者は今号が最終回。米田真理・雲形本研究会「豊橋市安海熊野神社蔵狂言伝書の性格[二]」(『名古屋

芸能文化』22。12月）は、タイトルに「狂言伝書」とあるが、同社蔵の狂言台本を紹介し、その本文の性格を検討したもの。「田沼」の署名がある台本が吉田藩士田沼小弥太の所持本であることや、「本多巌七良」の署名がある台本に波形本との校合が見られることなどを指摘する。なお、同誌には小谷成子ほかの「狂言共同社蔵『秘伝聞書』翻刻（五）」も載る。

一方、狂言史に関する新資料を紹介したのが、関屋俊彦「史料紹介『和泉流狂言太夫野村家由緒』」（『国文学』96。3月）、同「大蔵弥惣右衛門家のこと」（『地域文化の歴史を往く』。8月）である。前者は近年、関西大学図書館蔵となった新資料、後者は大蔵家蔵の「大蔵弥惣右衛門家過去帳」を紹介したもので、ことに後者は、従来、歴代の生没年が不明であった大蔵弥惣右衛門家に関する系譜資料として貴重である。

新資料の紹介が多く見られたのに対し、狂言の作品を取り上げた研究は少なく、網本尚子「狂言「宗論」試考」（『富士論叢』57-1。11月）、山本晶子「馬瀬狂言資料の紹介（6）―「蜂」を含めた新資料について」（『学苑』855。1月）が管見に入った。前者は、『宗論』が先行する狂言の様々な趣向を踏まえて作られた作品であることを分析したもので、出家を風刺した曲として理解されることの多い「宗論」を、囃子物と性質的に近い踊り念仏の用いられ方や、末尾における対立の和解といった点に注目して、むしろ祝言的雰囲気の濃い作品として捉えるべきではないかと提言する。後者は、伊勢馬瀬狂言の演者である個人宅に所蔵される狂言台本の写本等十二点を紹介し、そのうち、狂言「蜂」の新出台本について考察したもの。「蜂」は紀伊藩の『松井家狂言』に台本が見える独狂言であるが、馬瀬の台本はそれとは若干違い、国立国会図書館蔵『狂言大全集』の系統に近いこと、その『狂言大全集』に「ハチ出」の注記があり、実際に蜂役が登場した可能性があること、馬瀬の狂言の上演記録からも、それが裏付けられることなどを指摘する。また、中央でもほとんど上演されることのない稀曲「蜂」が馬瀬に伝えられた背景として、仙助座との交流を想定する。これまでの馬瀬狂言に関する一連の論考に続くものであり、地方における狂言伝承の実態を明らかにした堅実な成果といえよう。これまでの論考と併せ、一書にまとめられることを期待したい。

同じく、地方における狂言の伝承についての問題を取り上げたものに、『和泉流狂言の伝承―金沢と名古屋―』（【単行本】参照）所収の、以下の論考があった。西村聡「和泉流狂言史の金沢と名古屋」は、金沢と名古屋における狂言師の動向を中心に、江戸から明治にいたる和泉流の歴史を通観したもの。金沢・名古屋の狂言の伝承を比較する実演に先立っての講演がベースになっており、概説的な内容が主体ではあるが、『金沢の能楽』の記述の誤りを、依拠資料の原典に遡って指摘し、『御能方』第一冊所収の番組の年次を明確にするほか、山脇和泉家の早世した源助元政の享年に見直しを図るなど、手堅い考証に基づく重要な指摘が随所に見られる。高桑いづみ「狂言小舞の伝承を考える」、西村「〈棒縛〉の演出

とその変遷」は、ともに、当日上演された金沢と名古屋の和泉流狂言師による狂言小舞あるいは狂言〈棒縛〉の比較から見えてくる問題を論じたもの。それぞれ江戸期の譜本・台本を比較し、狂言の伝承が時代により、家・流儀によりどう変化したのかを丹念に明らかにしているが、ともに名古屋の狂言の方に和泉流の古い形が残され、金沢の方にはむしろ大蔵流との類似が多く見られるという結論に落ち着いている点が興味深い。このような伝承の違いが、いつの時点で起こったものなのか、今後さらなる解明を期待したい。なお、西村稿は狂言の伝承という問題を越えて、〈棒縛〉の作品そのものについても多くの発言がなされており、田口和夫・北川忠彦の両氏の説に対し、新たな見解を示すなど、作品研究としても注目すべき論考である。

また、作品そのものを取り上げた研究ではないが、狂言の出典に関する問題を取り上げたものに、岩崎雅彦「唱導劇から人間劇へ」（『中世の芸能と文芸』5月）があった。譬喩因縁譚を集めた経典の中に、狂言の内容と関連するものが散見することを論じたもので、『百喩経』に〈盆山〉と関係のある話、『直談因縁集』に〈武悪〉と関係のある話が収められていることを指摘する。普通に考えれば、これら譬喩因縁譚を参考に狂言が作られたということになろうが、『直談因縁集』と〈武悪〉との関係については、むしろ狂言の構造が影響している可能性をも視野に入れられており、譬喩因縁譚と狂言とが、相互に影響を及ぼしあうような、きわめて密接な関係にあったと結論づけている。譬喩因縁譚が語られていた唱導の場と狂言の成立圏との関わりや、唱導の担い手の実態など、多くの問題に波及する興味深い論といえよう。

このほか、狂言の地謡・同音の変遷について論じたものに、戸田健太郎「狂言における「地謡」の変遷（その二）」（『演劇学論叢』12。7月）があり、もともとシテのひとり謡、あるいは立ち役の斉唱であった謡が、時代が下るにつれて地謡による謡に変化していったことを、台本の分析を通じて明らかにする。その変化を、諸流の台本を丹念に追って明らかにしようとする姿勢は評価されるし、結論そのものについてもおおむね首肯しうるが、そもそも二回にわたって論じるような大きな問題とは思えない。論点を絞って、より簡潔に纏める工夫が必要であろう。田崎未知「間語り考―能〈藤〉における間狂言の役割―」（『愛知淑徳大学国語国文』35。3月）は、能〈藤〉の間語りの諸台本を比較したもの。間語りが「本説の提示と地方宣伝という二つの重要な役割」を担っていたという結論は、ごく当たり前のことを言ったに過ぎず、より深い読みが求められよう。

今年は珍しく、狂言の翻訳に関する論考がいくつかあった。丁曼「中国における狂言の翻訳と紹介」（『演劇映像学2011　第4集』。3月）は、最初に中国語への狂言の翻訳を試みた周作人による『日本狂言選』と、一九八〇年の申非による『日本狂言選』（同じ書名なれど別書）の訳とを比較し、それぞれの特徴を明らかにしたもの。周訳の方が用語を中国

風に置き換える代わりに、注で日本の風俗・歴史などを踏まえた詳細な解説を試みる傾向があるという。丁稿が過去における狂言の翻訳の問題を取り上げたものであるのに対し、実際の舞台上演で用いることの出来る狂言台本の翻訳を新たに試みたのが、関屋俊彦・サヴァス美苗「英訳狂言の問題」(『芸能史研究』196。1月)である。第二音節にアクセントがある狂言の口調に合うように作られたという英訳版の〈棒縛〉の台本が収められている。一方、実演のための台本の翻訳ではなく、狂言の解説教材としての英訳台本の案を掲載したのが、ウィリアム・ペトルシャック、飯塚恵理人「欧米文化圏能楽初心者向け狂言教材の研究―「蟹山伏」を中心に」(『民俗と風俗』22。3月)、同「欧米文化圏能楽初心者向け狂言教材の研究―「三本柱」を中心に」(『民俗と風俗』23。9月)、同「能楽初心者向け英文ビデオ教材の制作―能「嵐山」の小書「猿婿」の解説ビデオの原稿試作」(『名古屋芸能文化』22)である。これらの英訳台本がどれほど有用であるのか、その検証が今後の課題であろうが、こうした様々な試みが共有され、その試行錯誤の中から、より良い狂言台本の翻訳のスタイルが生まれてくることを期待したい。(以上宮本)

続いて、狂言の語学的研究を取り上げる。小林賢次「反語表現における文語性と口語性―元和卯月本謡曲と大蔵虎明本狂言とを比較して」(『近代語研究』16。3月)は、「疑問表現の形式によって、事態が成立しないはずだという結論を導く」反語を、謡曲と狂言で比較したもの。謡曲及び狂言謡・語りは、狂言台詞とほぼ相補分布する(両者に共通の形式が殆ど無い)事を示す。これは、特に推量の助動詞が前者でベシ・ム、後者でウ・ウズルと相補分布する事に由来する。意味に基づいて分類した上で形式を比較するのは難事で、～デハナイカが、確認を求めているものか(「それは舎弟ではないか」)、当然の表現か(「忝い事ではないか」)の区別は困難としている。尚、狂言の語学的研究に多くの業績を残された著者は、２０１３年に他界された。謹んで哀悼の意を表する。同誌には、米田達郎「江戸時代中後期狂言詞章に見られる終助詞ワイノについて―鷺流狂言詞章保教本を中心に」も載る。保教本に10例見えるワイノが、版本狂言記を除けば鷺流にほぼ限られる事を指摘し、「聞き手と話し手との間に認識の差があるときに、聞き手に対して発話内容を認識するべきであると話し手が考えている」時に使用され、狂言詞章が固定・伝承される(そのため他流台本に現われない)中でも、当時の口頭語(近松などで確認)からの影響が幾分かはあったものと論ずる。市村太郎・河瀬彰宏・小木曽智信「近世口語テキストの構造化とその課題」(『研究報告人文科学とコンピュータ』96-1。10月)は、虎明本狂言(大塚光信校訂本による)と「洒落本大成」を、同じタグセット・構造(ＤＴＤ)で処理する事を眼目とする。研究者を対象として、外形よりも言語の面に重き置いたタグ付けを行ない、将来的には形態素タグも付与する予定。「テキストの階層性と線条性を二重にカバーするのは難しい」とあるが、これはＸＭＬの前提とする文書

モデルに内在する本質的な欠陥である。尚、虎明本コーパスは、2015年に国立国語研究所より公開された。（以上豊島）

【外国語による能研究】

◎論文

Miyata Hiromitsu, Nishimura Ritsuko, Okanoya Kazuo, Kawai Nobuyuki. "The Mysterious Noh Mask: Contribution of Multiple Facial Parts to the Recognition of Emotional Expressions." *PLos One* 7.11.（宮田裕光、西村律子、岡ノ谷一夫、川合伸幸「神秘的な能面：感情表現の認識に顔の諸部分が果たす役割」）

上向きの能面は嬉しい感情を、下向きの能面は悲しい感情を表すというのが能のルールだが、このルールを知らない人に角度をつけた能面を見せると逆の解釈をする。その理由をさぐる本研究は、コンピュータで様々な顔の諸パーツを組み合わせた能面の画像を、能の知識をもたない学部生達にみせ、その感情を評定させる。その結果明らかになったのは、能面が、顔の諸パーツのそれぞれが異なる感情を表現している——ちょうどモナリザのような——「情動キメラ」であり（上向きの能面の目と眉は喜びを、口元は悲しみを表現し、下向きの能面の場合はすべてその逆）、また能面全体の表情の解釈は口元の表現に支配されるということであった。実験参加者を広げることで、文化的背景（国籍、能の知識の有無）と表情の解釈の相関関係を探るという、本研究の今後の成果に期待したい。

Moore, Katrina L. "Singing in the Workplace: Salarymen and Amateur Nō Performance." *Asian Theatre Journal* 29.1: 164-182.（カトリーナ・L・ムア「仕事場で謡うこと：サラリーマンと素人の能実践」）

日本の多くの会社において、戦後の職場レクリエーション運動の一環として謡曲部が作られた。こうした文化活動が、企業への社員の忠誠心や連帯感を育成することを目的として、企業側から推進されたものであることは従来指摘されているが、本研究はむしろ、当事者（謡曲部参加者二名と指導者一名）へのインタビューを通じて、謡曲部への参加が各個人の生活や人生にもたらした変化や新たな意義を明らかにする。

民族誌学的アプローチの限界とも言えようが、「職場の謡曲部の衰退が素人弟子の減少を招き、家元制度を危うくする」という本論文の今一つの結論を支えるためには、企業の謡曲部出身者が流派の経済システムにおいて占めてきた割合を示すデータが必要であったように思われる。

Rosenow, Ce. "High Civilization': The Role of Noh Drama in Ezra Pound's *Cantos*." *Papers on Language & Literature* 48.3: 227-244.（ローズナウ「『高度な文明』：エズラ・パウンドの『詩編』における能の役割」）

パウンドが後半生を通じて書き続けた未完の大作『詩編』のそこここに能作品の影響が見られることは広く知らせており、それら引用をとりあげた研究も数多く行われている。本論文はそれらを踏まえ、『詩編』全体を貫く「破壊」対「文明」の二項対立において、パウンドは後者を具現するものとして中世日本文化を、就中「能」を捉え、作品中に位置付けていたと論じる。

◎単行本

Emmert, Richard. *The Guide to Noh of the National Noh Theatre: Play Summaries of the Traditional Repertory*. Vols.1-4. Tokyo: National Noh Theatre, 2012.（リチャード・エマート『国立能楽堂の能ガイド：古典的レパートリーの作品概要』）

エマートが二十年来にわたって国立能楽堂での公演に提供してきた英語パンフレットを総集し、体系的な能狂言ガイド本として編集しなおしたもの。第一巻の序論によれば、全九巻を予定しており、うち六巻が現行能作品の解説に充てられている。

二〇一二年に出版されたのはこのうち最初の四巻で、アルファベット順に作品名がAからSeで始まる一六三曲が網羅されている。各曲四ページからなり、簡単なあらすじ紹介と作品情報ののち、作品を各段に区切ってのより詳細な解説が続く。また各巻末には、能の専門用語解説、各収録曲の英語訳の所在一覧、能・狂言の知識をさらに深めたい読者のための（英語を専らとする）文献リスト、そして使用図版リストがつく。一言でいえば、まったくの能初心者に対して能を紹介し、舞台鑑賞の際の理解を深め、さらには研究書へも導入するという、様々な機能を備えた極めて優れたガイドブックと言えよう。

懸念点は、当初予定された第五巻目以降が、二〇一六年二月現在で未刊であることである。早急な発行再開が望まれる。

Lim, Beng Choo. *Another Stage: Kanze Nubumitsu and the Late Muromachi Noh Theater*. Ithaca, NY: East Asia Program Cornell University, 2012. xxviii＋241 pp.（林明珠『もう一つの舞台：観世信光と室町後期の能楽』）

英語圏での能研究においてすっぽりと抜け落ちた感のあった室町後期の能に焦点をあてる、はじめての研究書。当時の社会における能の受容と相関させつつ観世信光の生涯と作品を追ったのち、「風流能」「唐物」「夢幻能」という三つの切り口から信光作品の特徴を詳述する。

全体の章立ては以下の通りである。信光作とされる作品一覧では、各作品の概説が添えられている。

第一部

第一章　観世小次郎信光画像賛

第二章　信光：人生と業績、観世家

第二部

第三章　「風流」を解読する
第四章　他者を演じること：「唐物」
第五章　「夢幻」に生きること
　第三部
第六章：風流能の（脱）構築
文献一覧
付録
1．信光作とされる作品一覧
2．信光年表
3．観世大夫系譜
4．役名解説
5．室町将軍系譜

解説を載せ、巻末には五番目に各流派で分類される曲目リスト、五番目物の作品が引用する和歌数のリスト、能用語のグロサリーが添付されている。

Shimazaki, Chifumi and Stephen Comme. *Supernatural Beings from Japanese Noh Plays of the Fifth Group: Parallel Translations with Running Commentary*. Ithaca, NY: East Asia Program Cornell University, 2012. xvi＋389 pp.（島崎千富美、スティーブン・コーミー『五番目物の能作品にみる超自然的存在たち：翻訳と注釈』）

一九九八年に没した島崎の謡曲英訳の遺稿を、長年にわたる協力者コーミーが遺志に基づいて「共著」にまとめたもの。〈国栖〉〈松山天狗〉〈鞍馬天狗〉〈昭君〉〈熊坂〉〈車僧〉〈鵜〉〈安達原〉八曲の注釈付き英訳を掲載する。冒頭の「序章」では、五番目物というカテゴリーの説明および取り上げた各作品の